

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第81集

# 保録ヶ谷遺跡

平成7年度日本坂トンネル改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第81集

# 保録ヶ谷遺跡

平成7年度日本坂トンネル改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

保録ヶ谷遺跡は平成7年度に調査された志太平野の東端に位置する遺跡である。周囲は国道150号バイパスや東名高速道路、東海道本線・新幹線などが集中する交通の要衝でありながら、現在でも広く水田が開け、近くに迫る山腹には茶やみかん、栗などが実る自然の恵みにあふれ、かつての官道であった日本坂添いには今となっては懐かしい風情を残した「花沢の里」と呼ばれる集落が営まれるなど、郷愁を誘われる地域もある。このような自然と現代の物質文化が混在する中に、遺跡は日本坂トンネル改築工事に際して発見された。本研究所が焼津市域で調査を行なうのは、前身である駿駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所時代の笛吹段・兎沢古墳群の調査以来実に12年ぶりである。

今回の調査では古くは平安時代、新しくは江戸時代末の遺構、遺物が検出されている。平安時代は灰釉陶器が出土しており、点数は少ないがこれまで江戸時代以前の様子が不透明であった花沢川上流域における人々の生活の起源を示すものとして興味深い資料である。室町時代末～江戸時代では志太平野東端の水田開発、畠の開墾の様子や居住地を伺い知ることができた。より安定した山裾に居住地を構えることや川の中に堰を設け積極的に水を取り入れ利用するなど、検出された遺構から現代社会では縁遠くなつた自然との接し方を教えられる部分も多い。これら近世の生産遺跡や集落の調査は志太平野東部では初めての例であり、今後の調査・研究の嚆矢となるものとして位置づけられよう。いずれの時期も、この地域の歴史を立体的に復元するという観点からは今後の調査の進展が期待できるところである。また、調査の過程では近代の道路遺構なども検出され、当然のことと見逃しがちの、これまでの連綿とした時の流れを経て現在があること、つまり現在私たちが生きている時間的な位置づけを調査を通して認識できたことは、調査の関係者にとってはなんらかの精神的な充足感を得るところであったろう。

文末になりましたが、遺跡の発掘調査に深いご理解とご協力を下さいました日本道路公団、焼津市教育委員会をはじめとする関係機関および多くの関係諸氏、ならびに現地調査を温かく見守って下さいました地元の皆様に心からの敬意と感謝の意を表したい。また、酷暑のなか調査にあたった当研究所の調査員、作業員諸氏の健闘を讃えたい。

1996年3月31日

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 齊 藤 忠

## 例　　言

1. 本書は静岡県焼津市野秋字保録ヶ谷ほかに所在する保録ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は「平成7年度日本坂トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として日本道路公団静岡建設所からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、焼津市教育委員会の協力を得て財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地調査は平成7年4月から9月まで行ない、引き続き整理作業を10月から平成8年3月末日まで実施した。
4. 調査体制は以下のとおりである。

所長 齋藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三田村昌昭、調査研究部長 小崎章男、  
調査研究二課長 佐野五十三、調査研究員 河合 修、松倉金吾、丸杉俊一郎
5. 本書は第Ⅰ章を松倉が、他を河合が執筆した。
6. 本書の遺物写真の撮影は楠本真紀子氏に依頼した。
7. 調査に関わる資料、出土遺物は全て財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
8. 本書の編集は財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。

## 凡　　例

1. 本書における遺構の表記（略号）は次のとおりである。

SD 溝・水路、SR 自然流路、SK 畦畔、SF 土坑、P ピット・小穴、SX その他
2. 本書における遺物の表記（略号）は次のとおりである。

P 土器、W 木製品、S 石製品、M 金属製品、B 動物遺存体・自然遺物
3. 挿図中の「北」は国土方眼座標の北を用いている。

# 目 次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 序                  |    |
| 例言                 |    |
| 凡例                 |    |
| 第Ⅰ章 位置と環境 .....    | 1  |
| 第1節 地理的環境 .....    | 1  |
| 第2節 歴史的環境 .....    | 1  |
| 第Ⅱ章 調査の方法と経過 ..... | 6  |
| 第1節 調査に至る経過 .....  | 6  |
| 第2節 調査の方法 .....    | 6  |
| 第3節 現地調査の経過 .....  | 7  |
| 第Ⅲ章 各地区的調査 .....   | 11 |
| 第1節 1区の調査 .....    | 11 |
| 1 概要               |    |
| 2 土層の状況            |    |
| 3 遺構と出土遺物          |    |
| 4 包含層の遺物           |    |
| 第2節 4-1区の調査 .....  | 19 |
| 1 概要               |    |
| 2 土層の状況            |    |
| 3 遺構と出土遺物          |    |
| 4 包含層の遺物           |    |
| 第3節 4-2区の調査 .....  | 29 |
| 1 概要               |    |
| 2 土層の状況            |    |
| 3 遺構と出土遺物          |    |
| 4 包含層の遺物           |    |
| 第Ⅳ章 まとめ .....      | 44 |

## 挿図目次

|      |                   |    |
|------|-------------------|----|
| 第1図  | 保録ヶ谷遺跡と周辺の遺跡      | 2  |
| 第2図  | 調査区と周囲の状況         | 4  |
| 第3図  | 遺跡周辺の地籍図と調査位置     | 5  |
| 第4図  | グリッド配置状況          | 6  |
| 第5図  | 遺構全体図             | 11 |
| 第6図  | 1-1区の土層状況         | 12 |
| 第7図  | 1-2区の土層状況         | 13 |
| 第8図  | 石組遺構 SX101実測図     | 14 |
| 第9図  | 石垣状遺構 SX102実測図    | 15 |
| 第10図 | 土坑 SF103実測図       | 16 |
| 第11図 | 1-2区出土遺物          | 17 |
| 第12図 | 遺構全体図             | 20 |
| 第13図 | 4-1区の土層状況         | 21 |
| 第14図 | 集石遺構 SX101実測図     | 23 |
| 第15図 | 烟遺構 SX102実測図      | 25 |
| 第16図 | 水路遺構 SD101実測図     | 27 |
| 第17図 | 4-1区出土遺物          | 28 |
| 第18図 | 4-2区の土層状況         | 30 |
| 第19図 | II・III層上面検出遺構全体図  | 31 |
| 第20図 | 溝状遺構実測図           | 32 |
| 第21図 | 水路遺構 SD101・102実測図 | 33 |
| 第22図 | IV層上面検出遺構全体図      | 35 |
| 第23図 | 畦畔 SK201実測図       | 35 |
| 第24図 | 土坑実測図             | 36 |
| 第25図 | V層上面検出遺構全体図       | 37 |
| 第26図 | 土坑実測図             | 38 |
| 第27図 | VI層上面検出遺構全体図      | 39 |
| 第28図 | 4-2区出土遺物          | 40 |
| 第29図 | 水路遺構 SD401実測図     | 41 |

## 挿表目次

|     |             |    |
|-----|-------------|----|
| 第1表 | 周辺の遺跡地名表    | 3  |
| 第2表 | 調査工程表       | 7  |
| 第3表 | ピット計測表      | 16 |
| 第4表 | 1-2区出土遺物一覧表 | 18 |
| 第5表 | 4-1区出土遺物一覧表 | 29 |
| 第6表 | 4-2区出土遺物一覧表 | 43 |

## 写真図版目次

- 図版 1 遺跡遠景（南側より）  
1-1区調査前・1-2区盛土除去風景（西側より）
- 図版 2 1-2区 遺構検出面全景  
1-2区 ピット群全景
- 図版 3 1-2区 自然流路SR101（北西側より）  
1-2区 石組遺構SX101
- 図版 4 1-2区 石垣状遺構SX102  
1-2区 自然流路SR101遺物出土状況  
1-2区 I層中遺物出土状況（1）  
1-2区 I層中遺物出土状況（2）  
1-2区 ピット114断ち割り状況
- 図版 5 4-1区・4-2区 調査前状況  
4-1区 遺構完掘状況全景  
4-1区 水路遺構SD101（西側より）  
4-1区 水路遺構SD101石組状況
- 図版 6 4-1区 畑遺構SX102完掘状況（南東側より）  
4-1区 畑遺構SX102石垣  
4-1区 畑遺構SX102遺物出土状況（1）  
4-1区 畑遺構SX102遺物出土状況（2）
- 図版 7 4-1区 集石遺構SX101（南西側より）  
4-1区 集石遺構SX101南面石垣  
4-1区 集石遺構SX101遺物出土状況（1）  
4-1区 集石遺構SX101遺物出土状況（2）
- 図版 8 4-2区 水路遺構SD101（東側より）  
4-2区 調査区南西面土層状況（SD101部分）  
4-2区 水路遺構SD102（北側より）  
4-2区 調査区北面土層状況（SD102部分）
- 図版 9 4-2区 IV層上面検出遺構全景  
4-2区 畦畔SK201（北側より）  
4-2区 土坑SF201完掘状況  
4-2区 土坑SF202完掘状況
- 図版 10 4-2区 土坑SF203完掘状況  
4-2区 IV層上面遺物出土状況（鉢）  
4-2区 V層上面検出遺構全景  
4-2区 土坑状遺構SX301覆土内疊混入状況  
4-2区 土坑状遺構SX301完掘状況
- 図版 11 4-2区 土坑SF301完掘状況  
4-2区 土坑SF302完掘状況

- 4-2区 土坑SF303完掘状況
- 4-2区 V層遺物出土状況（瀬戸・美濃皿）
- 4-2区 VI層上面検出遺構全景（手前部分）
- 図版12 4-2区 水路遺構SD401全景（西側より）
- 4-2区 水路遺構SD401覆土内遺物出土状況（漆椀）
- 4-2区 水路遺構SD401覆土内遺物出土状況（瀬戸・美濃皿、不明木製品）
- 4-2区 水路遺構SD401底面遺物出土状況（骨）
- 4-2区 VI層上面遺物出土状況（櫛）
- 図版13 1-2区出土遺物
- 図版14 4-1区・4-2区出土遺物
- 図版15 4-2区出土遺物
- 図版16 1-2区・4-1区・4-2区出土木製品

# 第Ⅰ章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

保録ヶ谷遺跡は静岡県中部に所在する焼津市の北部、野秋・小浜・吉津・花沢に位置する。焼津という地名は日本武尊が当地で族に襲撃された際に向い火を放って返り討ちにしたという説話が起源と言われている。字名にみられる野秋もこの状況を示した「野焼」が転じたものとする説がある。現在の焼津市は、焼津港を中心とした遠洋漁業基地として全国に知られているほか、東名高速道路や東海道本線・新幹線などが近接して通過する交通の要衝となっている。

遺跡は志太平野の東端にあたる沖積地上にある。この沖積地は標高501mの高草山と標高449mの花沢山から南へ延びる尾根とに挟まれており、両者の間の鞍部を流下する花沢川のもたらした堆積により形成されている。花沢川が扇状地を形成し始める吉津付近の現地表面は標高8m前後を測るが、花沢城の営まれた山塊の南麓付近は標高3m前後と低地化している。これは、花沢川が花沢山の裾に沿って流れていったため、高草山麓への冲積作用が弱く、ここに後背湿地を形成したものと理解できる。この沖積地は現在多くが水田や畑などの耕作地として利用されている。山裾近くの比較的安定している地域がおもに集落化しているが、国道150号線バイパスが建設されるなど、交通が簡便になるに従って次第に低湿地も埋め立てられて住宅地や商業地として開発されつつある。この沖積地は南側で朝比奈川、瀬戸川によって形成された沖積地と重複し、その南東側には主に大井川による広大な平野が開けている。

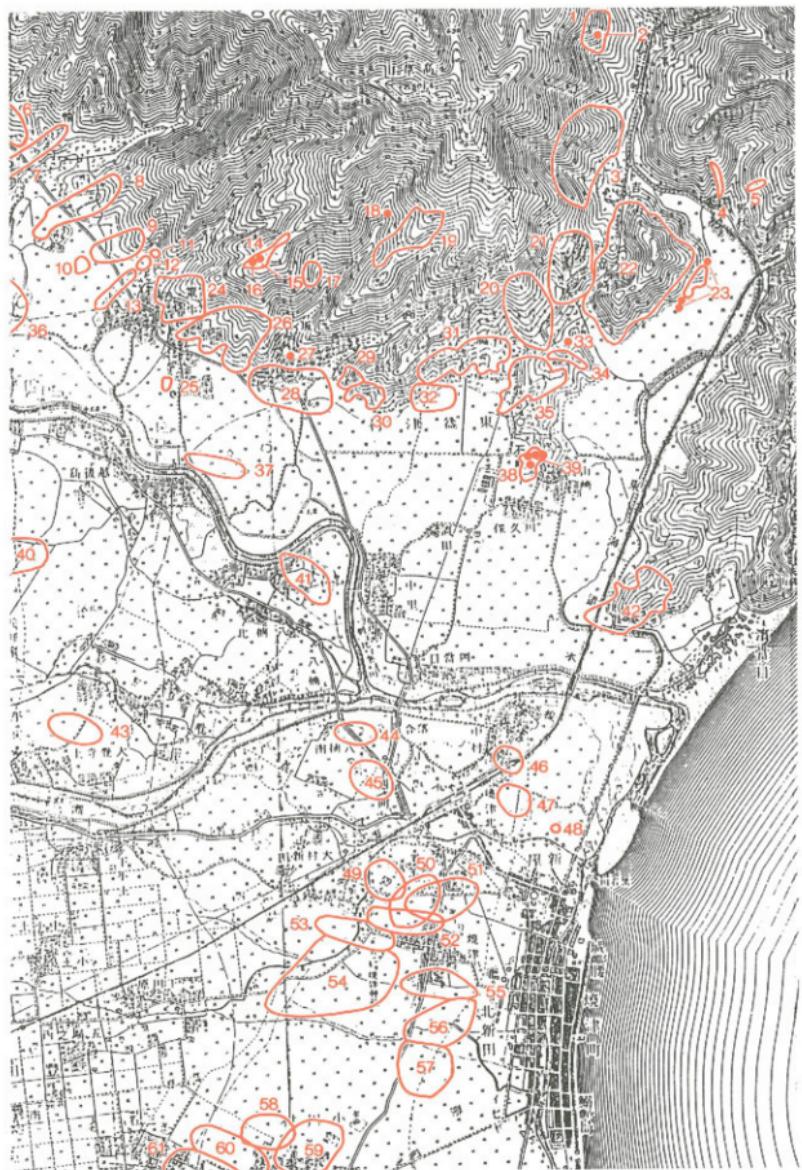
志太平野東側に広がる山稜はその最高峰をもつて高草山山塊と総称される。遺跡の西側に位置するのが高草山、北側に位置するのが花沢山である。高草山はアルカリ玄武岩溶岩からなる山で、枕状溶岩やタカラソウ石などの珍しい鉱物を産出することで知られている。山塊中で最高峰である山頂には高草神社の祠や無線中継塔が設置され、また、農道が中腹まで建設され山腹を茶畠やみかん畠などに利用している。花沢山はアルカリ玄武岩やアルカリ粗面岩からなる山で、東側は駿河湾に面し、100~300mの断崖をなしている。この断崖は大崩と呼ばれ、中腹を国道150号線が走っているが、30°以上の傾斜をもつため、たびたび崩落災害を起こしている。その他の山腹は高草山と同様に中腹まで農道が建設され、茶畠やみかん畠などに利用されている。

高草山と花沢山の間の鞍部を通る峠道である日本坂も、日本武尊の説話に影響されて名付けられているといわれる。峠の最高点は標高302mで、現在は農業用に使われるほかはハイキングコースになっているが、奈良~平安時代頃までは小川駅(焼津)~横田(静岡)間の官道であったと考えられている。『万葉集』にみられる「坂超えて阿倍の田の面にいる鶴のともしき君は明日さえもがも」に詠まれた「坂」はこの日本坂を指すものと考えられ、「焼津辺にわれ行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢し児らはも」からは当時の日本坂が交易路として重要であったことを伺い知ることができる。

## 第2節 歴史的環境

保録ヶ谷遺跡の周辺にはすでに縄文時代から人々の活動の跡をみることができる。ここでは保録ヶ谷遺跡の営まれ始める平安時代~中世までを、主に現在焼津市域となっている地域の遺跡を取り上げて順を追って概観してみたい。

縄文時代の遺跡には黒曜石製の石器が採集された別所ノ段遺跡(焼津市花沢別所)、石剣が採集された弁天遺跡(同市中港)がみられる。何れも調査されていないため詳細は不明であるが、別所ノ段遺跡が花沢川上流域の丘陵地に、弁天遺跡が現在焼津港になっている低湿地に位置することから、丘陵部で集落や狩場が営まれる一方で、低湿地や海辺でも活動が行なわれていたことが察せられる。



第1図 保録ヶ谷遺跡と周辺の遺跡（大正8年 大日本帝国陸地測量部 1/25,000図を使用）

| 遺跡名        | 時代       | 所在地       | 備考               | 遺跡名        | 時代     | 所在地       | 備考                 |
|------------|----------|-----------|------------------|------------|--------|-----------|--------------------|
| 1 別所ノ段道路   | 縄文       | 鹿津市花沢御所   | 一部残              | 32 萬尾遺跡    | 弥生~中世  | 鹿津市石脇萬尾   | 一部残                |
| 2 須所古墳     | 古墳後期     | ・ 花沢御所    |                  | 33 宮山古墳    | 古墳     | ・ 高崎宮山    | 消滅                 |
| 3 古津古墳群    | 古墳後期     | ・ 花津平     | 消滅、S38年調査        | 34 谷崎古墳群   | 古墳     | ・ 高崎谷崎    | 一部残                |
| 4 丸山古墳群    | 古墳後期     | ・ 罗致向山    |                  | 35 宮山古墳群   | 古墳     | ・ 石塚古墳は少  | 一部残、1号墳はS41年調査 消滅  |
| 5 丸利古墳群    | 古墳後期     | ・ 罗致堺     | 一部残、S57・61・62年調査 | 36 下敷田・山道跡 | 弥生     | 藤枝市下敷田字山崎 |                    |
| 6 宮崎遺跡     | 弥生~古代    | 藤枝市下敷田字宮崎 | 消滅、S36年調査        | 37 万ノ上遺跡   | 古墳     | 鹿津市万ノ上    |                    |
| 7 別の丁遺跡    | 弥生（中・後期） | ・ 下敷田字別の丁 | 消滅、S53年度調査       | 38 石塚城     | 中世（室町） | ・ 石塚下     | 一部残                |
| 8 岩内遺跡     | 弥生、古代~近世 | ・ 下敷田字地内  | 消滅、S53・54年度調査    | 39 山崎古墳群   | 古墳     | ・ 石塚山崎    | 一部残                |
| 9 東通遺跡     | 縄文、弥生~近世 | ・ 下敷田字東通  |                  | 40 越後島古墳   | 空良     | ・ 越後島     |                    |
| 10 下敷田遺跡   | 弥生、古墳、古代 | ・ 下敷田字前はか | 一部残、S29・58年調査    | 41 中里遺跡    | 縄文     | ・ 中里八幡宮ノ南 |                    |
| 11 沢添古墳    | 古墳後期     | 鹿津市澤間に方沢沢 |                  | 42 当日晝     | 中世（戦国） | ・ 洪当山     |                    |
| 12 児島古墳群   | 古墳後期     | ・ 葉牛民場    |                  | 43 大眾寺遺跡   | 古墳・鎌倉  | ・ 大眾寺下    |                    |
| 13 上屋敷古墳群  | 古墳後期     | ・ 葉牛上屋敷   |                  | 44 菅原道跡    | ?      | ・ 別北      |                    |
| 14 万の上城    | 中世（室町）   | ・ 開方はか    |                  | 45 幸田遺跡    | 空良     | ・ 別北      |                    |
| 15 万の上船塚   | 中世       | ・ 開方七谷    | 消滅               | 46 中港北遺跡   | 弥生・古墳  | ・ 中港      |                    |
| 16 万の上赤塚   | 古墳後期     | ・ 万の上石会号  | 一部残              | 47 中港遺跡    | 弥生     | ・ 中港      |                    |
| 17 斎茂古墳群   | 古墳後期     | ・ 板本草原    |                  | 48 有天遺跡    | 縄文     | ・ 中港      | 消滅                 |
| 18 佐藤原大塚   | 古墳       | ・ 板木大平    |                  | 49 花添遺跡    | 古墳~中世  | ・ 早町      | S35年調査             |
| 19 朝吹段古墳群  | 古墳後期     | ・ 板木高草山はか | 一部残、S35・61・62年調査 | 50 鹿津古墳群   | 古墳後期   | ・ 早町      | 消滅、6-7号墳はS50-61年調査 |
| 20 上ノ吉田古墳群 | 古墳       | ・ 高崎上ノ吉   | 消滅               | 51 道下遺跡    | 古墳~中世  | ・ 早町      | 一部残、S57年調査         |
| 21 高崎古墳群   | 古墳       | ・ 高崎ノ吉はか  | 一部残              | 52 道添遺跡    | 古墳~中世  | ・ 鹿津      | 一部残、S60・61年調査      |
| 22 花沢城     | 中世・近世    | ・ 高崎はか    | 一部残              | 53 斎藤遺跡    | 金良     | ・ 鹿津      |                    |
| 23 保原ヶ谷遺跡  | 古代~近世    | ・ 蒜秋ほか    | 保原ヶ谷古墳群を含む調査範囲   | 54 宮之原遺跡   | 古墳~中世  | ・ 鹿津      | 一部残、S33・35~37年調査   |
| 24 朝原敷古墳群  | 古墳後期     | ・ 聞吉屋敷    | 一部残              | 55 朝原敷     | 古墳~中世  | ・ 鹿津      | 一部残、S58年調査         |
| 25 小川田屋敷   | 中世       | ・ 方ノ上     |                  | 56 朝原遺跡    | 古墳     | ・ 鹿津      |                    |
| 26 宮脇古墳群   | 古墳後期     | ・ 板木宮脇    | 一部残              | 57 赤坂遺跡    | 古墳     | ・ 東小川     | 一部残、S60年調査         |
| 27 犀之谷古墳   | 古墳後期     | ・ 板木奥之谷   | 一部残              | 58 小澤田西遺跡  | 弥生・古墳  | ・ 小川小澤田   | 一部残、S57年調査         |
| 28 板木遺跡    | 古墳中期     | ・ 板木西之谷   | 一部残、S37年調査       | 59 小澤田遺跡   | 古墳~中世  | ・ 小川小澤田   | 一部残、S54~57年調査      |
| 29 佐藤落古墳群  | 古墳       | ・ 板木東落    | 一部残              | 60 道場田遺跡   | 弥生~中世  | ・ 小川道場田   | 一部残、S54~58年調査      |
| 30 宮ノ久保古墳群 | 古墳後期     | ・ 板木宮ノ久保  | 一部残              | 61 小川城遺跡   | 古墳~近世  | ・ 小川城/内堀  | 一部残、S54~62年調査      |
| 31 龍沢古墳群   | 古墳後期     | ・ 石塚現代はか  | 消滅、S50・61年調査     |            |        |           |                    |

第1表 周辺の遺跡地名表

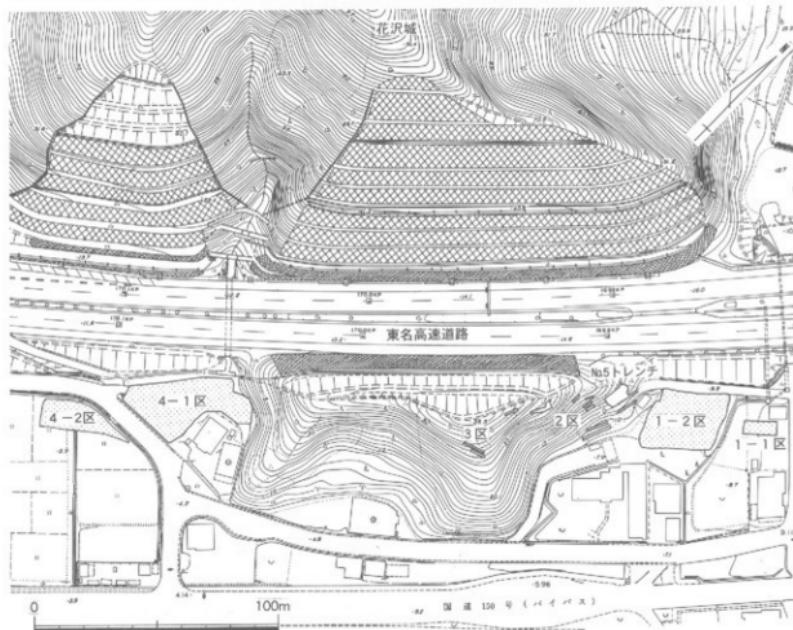
弥生時代では風尾遺跡（焼津市石脇風尾）、中港北遺跡、中港遺跡（同市中港）、小深田西遺跡（同市小川小深田）、道場田遺跡（同市小川道場田）、金剛作遺跡（同市三ヶ名金剛作）などが知られている。これらは主に瀬戸川河口付近の低湿地に営まれているが、風尾遺跡だけは高草山の南麓に位置している。両者の間には時期的、あるいは性格的な差があることも考慮される。この中で注目される遺跡は小深田西遺跡、道場田遺跡である。何れも弥生時代末の遺跡で、小深田西遺跡では竪穴住居跡が、道場田遺跡では方形周溝墓群が検出されており、当時の沖積地上での生活様相を伺うことができる。

続く古墳時代には、沖積地上に営まれる遺跡のはかに、丘陵地に古墳が築かれるため、全ての時代を

通じて最も多く遺跡が残されているとみることもできる。

沖積地上に営まれる遺跡には小深田遺跡、小深田西遺跡（前期）、道場田遺跡（前～中期）、宮之腰遺跡（中期、焼津市焼津）などがある。小深田遺跡からは集落址が、小深田西遺跡からは集落址と4基の方墳が検出され、特に後者は低地における造墓の様相と集落の関係が伺える好資料となっている。また、道場田遺跡からは前期と中期の水田が検出されており、沖積地上での生産活動の様子を知ることができる。宮之腰遺跡からは集落址と土器が集積された祭祀遺構や集落を構成する堅穴式住居の中には壁材が残る焼失住居が検出されており注目される。また、この遺跡から出土した土器は静岡県中部の土器編年の標識のひとつになっている。以上のように沖積地上の遺跡は、現在のところ中期までしか明確になっていないが、丘陵上に営まれる古墳の多くが後期にあたることや、道添遺跡や道場田・小川城遺跡などからも6世紀後半以降の須恵器が出土しているため、沖積地上のいずれかに後期の集落が存在することは確実であろう。

丘陵地に築かれている古墳で現在知られている最も古いものは5世紀末～6世紀初頭に構築された谷山1号墳（焼津市石駒山崎）である。埋葬施設は粘土床を伴うもので、鉄剣と碧玉製の管玉が出土している。そのほかは6～7世紀代の群集墳が多くを占める。これらの群集墳は志太平野周縁に展開する古墳群の中でも高崎支群として一括して捉えられ、この中は更に上屋敷、奥屋敷、宮腰、笛吹段、東海道、箕沢、谷沢、谷崎などの古墳群に細分される。今までに調査されている笛吹段古墳群をみると高草山の南側斜面にはほとんどマウンドをもたない形で併存し、埋葬施設は横穴式石室で、灰釉系陶器の小皿を出土した20号墳などにみられるように再利用されているものもある。この中で不明瞭な墳丘を伴うこ



第2図 調査区と周囲の状況

とは当該地域の古墳に共通する傾向として捉えられている。丘陵地以外でも、造墓は確認されている。先に挙げた小深田西遺跡のほかに塩津古墳群（焼津市栄町）から6～7世紀の横穴式石室をもつ円墳が検出されている。以上のような特徴から、丘陵地では低墳丘のため未確認のもの、沖積地では埋没しているものなどが未だに多く存在することが予測されている。

奈良・平安時代の遺跡は比較的少なく、牛田遺跡（焼津市駅北）、越後島遺跡（同市越後島）、蛭田遺跡（同市焼津）、小川城遺跡（同市小川城ノ内堀）が知られている。このうち調査が行なわれている小川城遺跡では掘立柱建物群が検出され、小川駅家に関連するものと推測されている。

鎌倉～室町時代に至ると武士の台頭を反映してか城館遺跡が多くみられるようになる。方ノ上城（同市関方ほか）、山田屋敷（同市方ノ上）、花沢城（同市高崎ほか）、石鷲城（同市石脇下）、當目砦（同市浜當日）、小川城遺跡などに代表される。このうち鎌倉時代まで遡るのは小川城遺跡で、出土した灰釉系陶器に記された「七郎丸」銘などから、在地領主層が興る過程を伺い知ることができる。室町時代に至ると、小川城遺跡は今川範忠・義忠に仕えた長谷川次郎左衛門尉正宣の居館に比定されており、調査によって堀と土塁に囲まれた屋敷地が明らかになっている。また、地籍図から遺跡の周辺に小規模な方形区画が存在することが指摘されており、長谷川氏の居館を中心として集落が営まれていたと想定されている。石鷲城は文明年間（1469～1487年）伊勢新九郎が居住したところとされている。現在でも曲輪や土塁、堀切などの遺構を見ることができる。方ノ上城は明応2年（1493年）頃、花沢城は明応～文亀（1493～1504年）頃にそれぞれ構築されたとする説がある。方ノ上城については詳しいことは分かっていないが、花沢城は永禄13年（1569年）、武田信玄の侵略の際に小原肥前守鎮実が籠って戦ったことが知られている。

城館遺跡以外には中里遺跡（同市中里久保宮ノ南）、大覚寺遺跡（同市大覚寺下）、方ノ上経塚（同市関方七谷）などが知られているが、当該期の遺跡の発掘調査は余りなされておらず、今後の成果が期待できる部分もある。



第3図 遺跡周辺の地籍図と調査位置

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査に至る経過

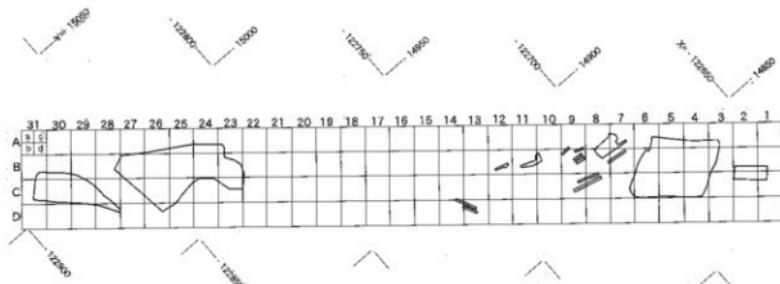
昭和44年の開通以来、東名高速道路の交通量は日々増加の一途をたどっており、県下最大の要衝である日本坂トンネルでの渋滞も今や日常的になりつつある。特に行楽や帰省のシーズンには数十kmに及ぶことがあり、この解消が急務となっていた。

このような状況下、日本坂トンネルの改築工事は平成6年から事業化され、現行のトンネルの東側に新たに掘削されるトンネル部分から工事が着手された。一方で、トンネルに至る道路は現道が拡幅されることになるが、この部分には埋蔵文化財の存在が考慮されたため平成6年12月から翌年2月までに焼津市教育委員会による試掘調査が実施された。その結果中世から近世に至る遺構、遺物が検出され、遺跡として認知され本調査の必要が生じた。この調査には調査面積、期間などの関係から財静岡県埋蔵文化財調査研究所があたることとなり、急遽平成7年3月末に契約が行なわれ4月から現地調査期間半年の予定で早速調査に取りかかった。

### 第2節 調査の方法

今回の調査は新しく道路が拡幅される地域のうち焼津側の4,900m<sup>2</sup>を対象に行なわれた。調査範囲には計画されている路線方向に平行して10m×10mのグリッドを設定し、北西側から南東側へA・B・C・Dのアルファベット、北東側から南西側にかけて1・2・3…の数字を付し、この組合せによりA1グリッド、B2グリッドのように表記し、調査の便宜を図った。また必要に応じてグリッド中を5m四方に分割し a～d として包含層中の遺物取り上げなどに対応した。なお、このグリッドは第4図のように国土方眼座標中に位置を測り込み周辺地域との整合に努めた。

調査は対象範囲を地物等の制約によって北東側より1-1区、1-2区、2区、3区、4-1区、4-2区の6区画に分割し1-2区、4-1区、4-2区において分層発掘を行なった。2区、3区については周知の遺跡である保録ヶ谷古墳群の存在が想定されたため古墳の位置確認のため複数のトレーナーを設定して、必要に応じて拡張し遺構の検出に努めた。遺構が確認された1-2区、4-1区、4-2区では、各区で遺構面ごとに遺構を種類別に分類して登録を行ない、遺構記号+登録番号で表記した。出土遺物は土器、木製品、石製品、金属製品、自然遺物に分類して遺構単位、あるいはグリッド毎の層位単位で取り上げ、分類別に作られた台帳に登録して遺物記号+登録番号を付した。図面記録はすべて



第4図 グリッド配置状況

手書きで行ない、遺構平面・断面図、土層断面図、遺物出土状況図は基本的には縮尺1/20で作成し、必要に応じて1/10で作成した。また、調査の進行に伴って概略的なデータ採取の目的で縮尺1/40、1/100で遺構実測図を作成し、調査検討資料とした。写真記録には6×7版、35mmモノクロ、35mmカラースライドを行い、調査工程記録用として35mmカラーネガを用いた。

### 第3節 現地調査の経過

調査に先立って、平成7年4月中旬に整理作業用と作業員休憩用を兼ねたプレハブを4-2区の西側に設置し、発掘資材の搬入を行なった。実質的な調査は5月上旬より4-1区の表土除去を重機を用いて行なうことから開始した。表土除去完了後、防護フェンスの設置や電気工事を行ない、人力で掘り下げに移った。湧水が予期された4-2区は板打込み、防護フェンスの設置や電気工事を行なった後、5月上旬より人力で表土除去を行なった。盛土の除去の必要があった1-2区は人力による調査開始が遅れ6月上旬から作業を開始した。2区、3区は1-2区、4-1区、4-2区の調査の合間をみて漸時それぞれの区画から人員の一部を割いて行なった。1-1区は最後に調査に着手したが、1-2区で遺構が希薄であったため、大幅に調査範囲を縮小して行なった。各区画の調査経過は第2表にまとめたとおりであり、その作業内容を区ごとに以降に述べておく。

#### 〈1-1区の調査〉

平成7年9月11日～12日

重機(0.4m<sup>3</sup>)を用いて調査を開始する。盛土除去後、粘土層を確認するがビニール等が混入しているため除去し、更に下層まで掘り下げるが、自然堆積層と思われる砂礫と粘土の互層が続き、遺構が検出されなかつたため土層の記録後埋め戻し、調査を終了する。

#### 〈1-2区の調査〉

平成7年4月24～28日・5月15～19日・5月22日～6月2日

調査を開始する。重機(0.4m<sup>3</sup>)を用いて盛土を除去する。以外と盛土が厚く作業に手間取る。並行して調査区周囲にフェンスを設置し安全対策に努める。調査区東隅に集水樹を設置し湧水に対応した。なお、5月1～2日・8～12日は工程の都合上作業を中断した。

6月5～9日

調査区内に排水溝を兼ねたトレンチを設定し、並行して焼津市教委による試掘坑を再度掘り上げる。

| 月<br>区画          | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 備<br>考                         |
|------------------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|--------------------------------|
| 現<br>地<br>調<br>査 |   |   |   |   | ↔ |   |    |    |    |   |   |   |                                |
|                  |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |                                |
|                  |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   | 4月末～6月上旬は重機による盛土除去、9月中旬以降は撤収作業 |
|                  |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |                                |
|                  |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   |                                |
| 4-1              |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   | 5月上旬は重機による盛土除去、9月中旬以降は撤収作業     |
| 4-2              |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   | 9月中旬以降は撤収作業                    |
| 現地整理             |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   | 9月中旬以降は撤収作業                    |
| 整理報告             |   |   |   |   |   |   |    |    |    |   |   |   | 中原整理事務所において作業を実施               |

第2表 調査工程表

この週より人力による調査に入り、I層の除去から開始する。

6月12~16日

トレンチの設定、I層の除去を継続して行ない、次いでII層上面での遺構検出作業に移行する。ピット群が検出された調査区西半部を清掃し、遺構検出状況写真を撮影する。

6月19~23日

調査区東半で遺構検出作業を行なう。遺構検出後、遺構の堀り上げを行なう。並行してトレンチを更に深く掘り下げ、土層の観察・把握を行なう。

6月26~30日・7月3~7日

自然流路SR101の検出・掘り下げ、石組遺構SX101、石垣状遺構SX102の検出作業を行ない、次いで写真撮影、実測を行なう。なお、7月3~6日は降雨のため作業を中止した。

7月10~14日・17~21日

調査面の地形測と、ピット群の平面図、遺構全体図、土層図を作成する。また、並行してSX101、102の実測図の補正を行なう。

7月24~28日

SX101・102を解体し、SR101を更に掘り下げるが、涌水のため中位で掘り下げを一時中断し、全体がより深くなった段階で再開することにした。遺構完掘状況の全景を撮影した後2m四方の試掘坑を4箇所設定し、トレンチで灰釉陶器の出土が確認されていたIII-13層までを先行して掘り下げる。

7月31日・8月1~4日

試掘坑によりII層~III層中位までが無遺物層であることを確認した後、調査区東半部から重機(0.4m<sup>3</sup>)を用いて灰釉陶器が出土したIII-13層までを除去する。また、除去が終了した部分から遺構検出作業を行ない、遺構のないことを確認した後に人力で解体し遺物の抽出を行なった。なお、3日は体験学習実施のため作業を中断した。

8月7~11日・14~18日

調査区西半部についてもIII-13層上面までを重機で除去し、遺構検出作業の結果、遺構のないことを確認した後に人力で解体し遺物の抽出を行なう。なお、14~18日は工程の調整により作業を中断する。

8月21~25日

III-13層以下の砂疊層を重機(0.4m<sup>3</sup>)を用いて除去する。

8月28~31日・9月1日

試掘調査によって古墳時代の堆積層とされたIII-15層上面での遺構検出作業を行なう。遺構がないことを確認した後、幅1mのトレンチを設定して掘り下げ、以下が無遺物層であることを確認する。

9月4日~8日

調査区四方の土層図を作成する。また、補足資料の採取のため、調査区とその周辺の状況を縮尺1/100で平板測量を行ない、調査の全てを終了した。

〈2区・3区の調査〉

4月24~28日、5月8~12日・15~19日

トレンチを設定し、その排土を上げる部分に土留めの施設を設置して土砂の崩落を予防した後、各トレンチを掘り下げる。なお、5月1~2日は作業を中断した。

5月22日~26日

2区No5トレンチより溝状の窟みの中に一抱え大の石による集石が検出され、古墳の石室の可能性を考慮する。トレンチを漸時拡張し清掃後、記録写真の撮影を行なう。

5月29日~6月2日・6月5~9日・12~16日

No 5 トレンチ内検出の集石を実測する。なお、工程の調整のため作業を中断する。

6月19～23日・26～30日

No 5 トレンチを拡張し集石の性格の把握に努める。並行して集石上面の解体を行なう。その結果石は組上げられていないことが判明し、溝状の窪みから近世～近代の磁器片と棲瓦片が出土したほか、集石内部からは遺物が出土しなかったことから山腹からの落石が集中したものと考えるに至った。他のトレンチでも遺構が検出されないことを確認した後、各トレンチの平面位置を実測し、調査を終了した。

#### 〈4-1区の調査〉

5月 8～12日

重機（0.4m<sup>3</sup>）を用いて盛土・旧表土を除去する。除去後、排水溝を兼ねたトレンチを掘削し土層観察を行なう。並行して調査区周囲にフェンスを設置する。

5月15～19日・22～26日・29～6月 1日

遺構検出作業、トレンチの掘削、調査区南側にみられた擾乱部分の除去を行なう。作業終了後調査区内の清掃を行ない、遺構検出状況の全景写真を撮影する。

6月 5～9日

集石遺構 SX101の集石部分を清掃し、写真撮影後実測に取りかかる。また、水路遺構 SD101を掘り下げに取りかかる。

6月12～16日・19～23日・26～30日

SD101を掘り上げて実測作業に移る。SX101の実測作業も継続して行なう。また、調査区北側に石垣によって区画された箇所をトレンチで検出した。この石垣が北西側の丘稜部にみられる谷地形の延長上にあるため、流路（沢）であろうと考え石垣に囲まれる部分の覆土を掘り下げに移った。なお、この遺構を SR101とした。また、南東側に検出されていた弧状の石列が石垣に連結することを確認した。

7月 3～7日

SX101の平面の実測と、レベルの計測を行なう。なお3～6日は降雨のため作業を中止した。

7月10日～14日

SD101のレベル計測のつづきを行なう。また、SR101底面に東西方向の平行する溝が掘られていることと北側に築かれている石列を確認し、この検出状況を写真撮影した後、更に掘り下げを開始する。

7月17～21日・24～28日・31日

SR101内の溝状遺構を掘り下げる。並行して北西～南東方向の石垣の実測を行ない、終了後、断面図を作成しながら解体する。31日までにあらかじめ取付いた石垣を解体する。また、平行する複数条の溝や石列、弧状の石列などから石垣は畑の区画、溝は縦に埋め込み処理するための施設と考え整理し、流路 SR101としていた名称も畑遺構 SX102と改めた。

8月 1～4日

SX102北側の石列と南東側の弧状の石列の実測を行ない解体する。また、掘り下げを終了した平行する溝の実測を行なう。

8月 7日～11日・14～18日

SX101周辺のⅡ層を除去する過程で SX101から南西側に延びる帯状の集石と南東側に取り付く石垣を検出する。

8月21～25日

SX101周辺の清掃を行ない、実測作業に取りかかる。平行して遺構完掘状況の全景写真撮影のため調査区内の清掃を行ない、25日に撮影する。

8月28～31日・9月 1日・4～8日・11～12日

SX101付近と調査区北面の土層堆積状況の実測を行なう。また、SX101の解体を行ないながら遺構断面図を作成した後、SX101を解体し、調査の全てを終了する。

#### 〈4-2区の調査〉

5月8～12日・15～19日

人力により表土除去を行なう。並行して調査区周囲にフェンスを設置し、表土の除去が終了した部分から排水溝を兼ねたトレンチを掘削し、調査区西隅に集水枠を設置した。

5月22～26日・29日～6月2日

II層上面と一部III層上面で遺構検出作業を行ない、水路遺構SD101・SD102、道路遺構、溝群などを検出す。検出後、遺構面を清掃し検出状況写真を撮影する。その後、焼津市教委による試掘坑を再度掘削し土層を確認するとともに、表土上から入っていた攪乱を除去する。

6月5～9日・12～16日・19～23日

SD101、SD102の掘り下げを開始する。並行して溝群の掘り下げ、SD101、道路遺構の実測、遺構配置図の作成を行なう。

6月26～30日

SD101・道路状遺構の実測を継続するとともに、溝群とSD102の実測を開始する。実測終了後完掘状況の写真撮影をし、SD101・102の杭を取り上げながらII層・III層を解体する。

7月3～7日・10～14日

II層・III層の除去を完了し、下位にあるIV層上面で3基の土坑と杭列を伴う畦畔を検出した。ただし、3～7日は降雨のため作業を中止した。

7月17～21日

検出状況写真の撮影後、土坑を完掘し、畦畔の断ち割りを行なう。完掘状況の撮影を行ない、地形測量後、IV層を除去し遺構を解体する。

7月24～28日・31日～8月4日・7～11日

V層上面で精査の結果3基の土坑を検出した。検出状況写真を撮影した後、掘り下げにかかる。土坑を完掘し、V層上面の地形測量、完掘状況の写真撮影を行ない、V層を除去し遺構の解体を行なった。

8月14～18日・21～25日

VI層上面で室町時代末の水路遺構SD401を検出し、漸時掘り下げを開始する。この水路はII層・III層上面検出の水路遺構SD101のはば直下にあたり、中世末から近代まで水路の位置が継承されていることが判明した。

8月21日～25日

水路遺構の掘り下げと、実測作業を並行して行なう。24日までに掘り上がり、25日に遺構面の清掃の後、完掘状況の写真撮影を行なった。

8月28日～31日・9月1日・4～5日

SD401の護岸に用いられている杭を取り上げるとともに、トレンチを設定し、以下の層が無遺物層であることを確認した。並行して調査区壁面で土層堆積状況の実測とVI層上面の地形測量を行ない、調査の全てを終了した。

## 第Ⅲ章 各地区の調査

### 第1節 1区の調査

#### 1 概要

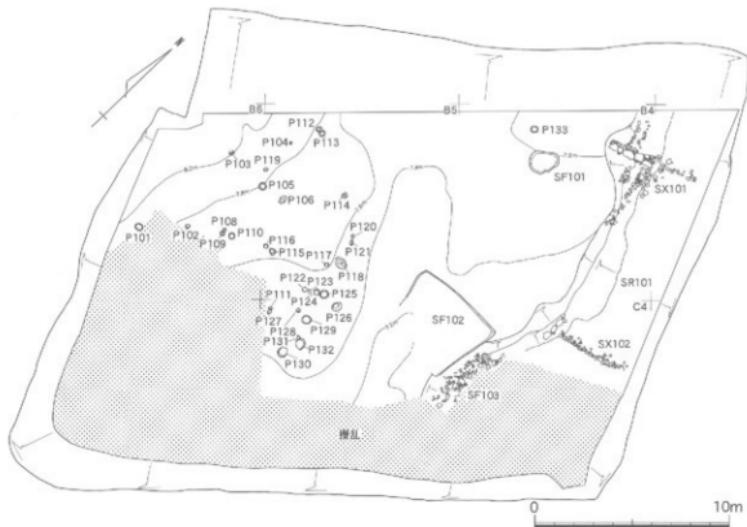
1区のうち遺構が検出されたのは1-2区で、隣接する1-1区では検出されなかった。1-2区の遺構は脆弱な黄色砂層(II層)上で検出された。当時の生活面はより安定した上層にあったものと考えられるが、II層を被覆する緑色砂礫層(I層)により押し流されるかたちで破壊されていた。

遺構は調査区の西側に偏ってピット群が、東側に自然流路が検出された。ピットは33基を数える。柱穴として建物は認定し得なかったが、柱根を残すものや直線上に並ぶものがあったためなんらかの施設が営まれていたものと考えられる。自然流路は右岸が検出された。流路の中には埋まりかけた時期(江戸時代後半)に石組遺構や石垣状遺構が築かれており、川に対して集水施設や護岸などのアプローチが行われていたことが伺われる。ピットと自然流路との時期的な相関関係は明らかにし得なかったが、より地盤が高く安定した山裾部分に集落が営まれていたことは確かであろう。

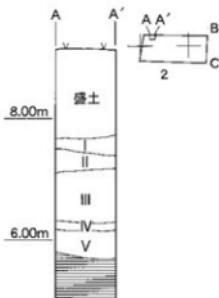
また、遺構は検出されなかつたが、包含層(III-13層)中から平安時代後半の遺物が出土している。調査区に近在して当該期の居住域の存在が察せられる。

#### 2 土層の状況(第5図、6図)

1-1区で確認された土層は現地表(標高9.2m)から約3.5m下(標高5.7m付近)までである。盛土は山上や瓦礫を以って行なわれており、極めて固くしまっていた。盛土直下には南北方向の杭列が打ち込まれた2層の粘土層が検出されたが、ビニールなどが混入していたため、盛土が施される直前まで耕作されていた水田作土と鋤床層であることが判明した(I層、II層)。以下には砂礫層(III層、V層)



第5図 遺構全体図



と締まりの乏しい粘土層（IV層）が交互に堆積しており、遺物も遺構もみられなかったことから自然堆積層であると判断した。

1-2区で確認された土層は現地表（標高8.5m）から約2m下（標高6.5m付近）までである。調査前には最上層に1-1区と同様に山土や瓦礫を以て、最も厚い部分で1.5mの厚さを測る盛土がなされていた。盛土以下を概略的にみると、丘陵裾部にあたる調査区北西側には斜面から崩れ出た密な粘土が堆積し、南東方向にゆくにつながって水性堆積による粘土と砂礫の互層に推移する傾向がみられる。

I層とした錆色の砂礫層とII層とした黄色砂層以外には調査区全体に安定して堆積している層はない。以下に上位より順にみてみよう。

I層は錆色を呈する砂礫層である。極めて密にしまっており、灰釉

**第6図 1-1区の土層状況** 陶器や近世陶磁器を若干量混入する。これらの遺物はI層が堆積する過程で遺構面、あるいは包含層を削ったことにより混入したのであろう。

II層は黄色砂層である。ラミナが発達しており、穏やかな水性堆積によって形成されたものとみられる。この層の上面で遺構を検出したが極めて脆弱であるため、生活面が営まれていたとは考え難い。調査区南西側では上面にピットの覆土と類似する黒色粘土層（1層）が堆積していることから、元来生活面はII層上面に堆積していた粘土層上にあり、I層の急激な押し出しによって遺構底面をII層中に残したかたちで削除されてしまったと考えられる。

II層以下は砂礫と粘土の互層であり、層位として調査区全体に安定していないため一括してIII層とし、構成する層位それぞれに枝番号を付けて表記した。粘土は20cm前後、砂礫は10~40cmの厚さを測る堆積が普遍的であり、インターフィンガー状に入り組む部分や粘土層に発達したラミナが随所に観察されることから、水性の自然堆積によって形成されていることが明らかである。なかでも比較的広範囲にみられる黒褐色粘土層（III-13層）からだけ若干量の遺物が出土している。折戸53~百代寺期に比定できる灰釉陶器が主体であり、この層位の形成時期が平安時代の後半であることを示している。また、同層からは流れ込みとみられる細かな自然木（枝など）や葦の根に混じって下駄、蓑串が出土している。

### 3 遺構と出土遺物

#### 自然流路 SR101（図版3）

B3グリッドからC5グリッドにかけて右岸のみ検出された江戸時代後半までの河川である。規模は検出された範囲で幅4~8m、調査区東南壁面で深さ1.2mを測る。1-1区の調査でもこの左岸は検出されなかつたため、幅は30m以上になる可能性がある。流路はほぼ南北方向で、南側で西よりに膨らんでいる。岸には護岸と考えられる一抱え大一握り拳大の礫の集積がみられる。また、半ばまで埋まりかけた時点での流路に直行する方向の石組などが築かれている。

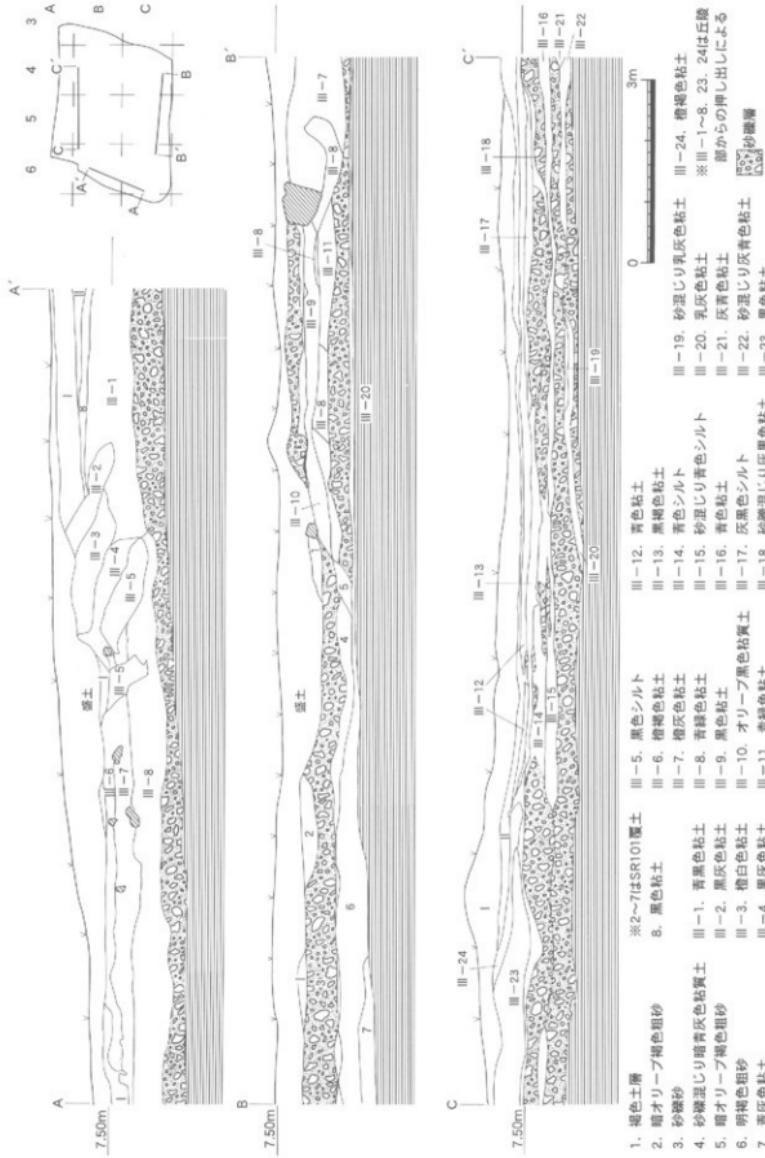
遺物は覆土から灰釉陶器、灰釉系陶器（いわゆる山茶碗）、近世陶磁器などが出土している（第11図1~7）。

灰釉陶器には碗がみられる（1）。底部片で、やや鈍った爪形の高台をもち、底部外面には糸切り痕を残す。折戸53号窯式の新しい段階に並行する東遠江産のものと思われる。

灰釉系陶器には碗、壺、甕がみられる（2・6・7）。

碗（2）は底部片で、断面三角形の高台をもち、底部外面には糸切り痕を残す。13世紀前半の渥美・湖西産と思われる。

壺（6）は胴部片で、器面はヘラ状工具の削りで調整されている。ヘラ描きの横位の沈線が引かれており、三筋壺の一部と考えられる。



第7図 1—2区の土層状況

甕（7）は胴部片で、器面はタタキとナデで調整されている。叩き具は1cmあたり1本の粗い叩き目をもつもので、連続して施されている。甕、甕はともに渥美産と思われる。

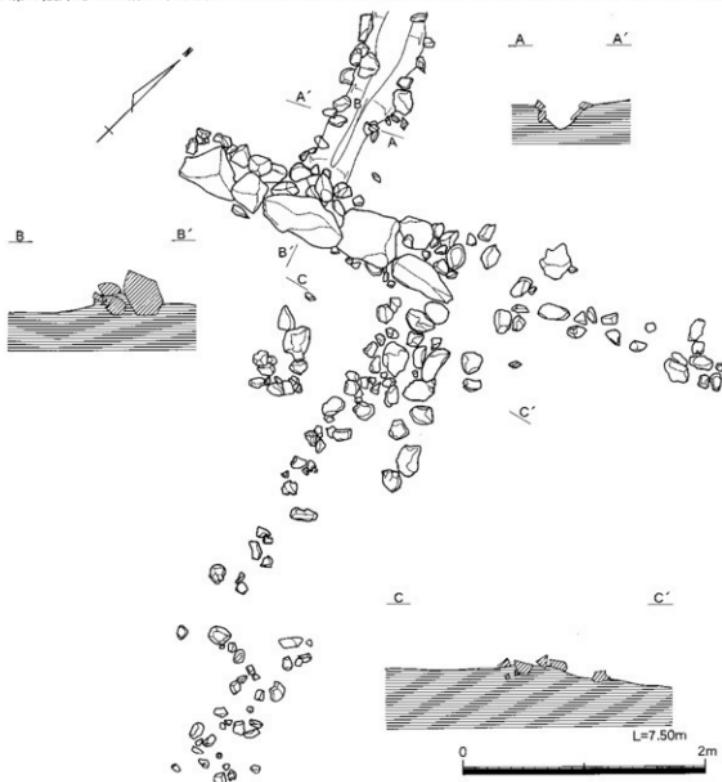
近世陶器には甕、皿がみられる（3～5）。

碗（4・5）はいずれも瀬戸・美濃産の丸碗で、4は張り付けによる断面長方形の高い高台をもち、黄褐色の釉が全面に掛けられている。17世紀前半のものと思われる。5は貼り付けによる低い断面矩形の高台をもち、内面全体と外面の胴部過半まで褐色の釉を掛ける。17世紀後半のものと思われる。

皿（3）は志戸呂産で、口縁部以下の外面はすべてヘラ削りで調整されており、高台は碁笥高台が削り出されている。口縁部には内外面に鉄釉を掛ける。17世紀代のものと思われる。

#### 石組造構 SX101（第8図、図版3）

自然流路SR101内の北側に検出された、SR101が半ば埋まった時点で築かれた江戸時代後半の造構である。SR101に直交して一抱え大の石を直線状に配置し、その延長上と、末端に接してSR101に平行に人頭大～拳大の礫を配置する。一抱え大の石列の北側には幅20～30cm、深さ20cm前後の人頭大～拳大の礫で護岸された溝が取り付いている。溝が取り付くことからこの施設が堰のような機能も有している。



第8図 石組造構SX101実測図

たことも考え得る。

遺物は江戸時代のものと思われる瓦が疊に挟まって出土したが小片のため図示できなかった。

#### 石垣状遺構 SX102 (第9図、図版4)

自然流路 SR101内の南側に検出された江戸時代の遺構である。SR101に直交して人頭大～拳大の礫を直線状に2段に積み上げている。西の端はSR101の護岸と思われる一抱え大の石列に直交している。これに伴う遺物は出土していない。

#### ピット・土坑 (図版2、第3表)

ピットはC 6 グリッド杭周辺に32基、B 4 グリッドで1基が検出された。規模は第3表にみるとおりであり、平面形状が円形や楕円形のもので占められている。特に建物の認定はできなかったが、ピット118、125、129、130が直線上に並ぶことや、ピット114から柱根が出土していることから、なんらかの施設が存在したことは確実である。並ぶピットはSR101やSX101・102とほぼ平行、直交する関係にあり、流路を意識した建物配置がなされていたことが伺える。

遺物はピット114から柱根 (図版16) が出土した以外にはみられない。

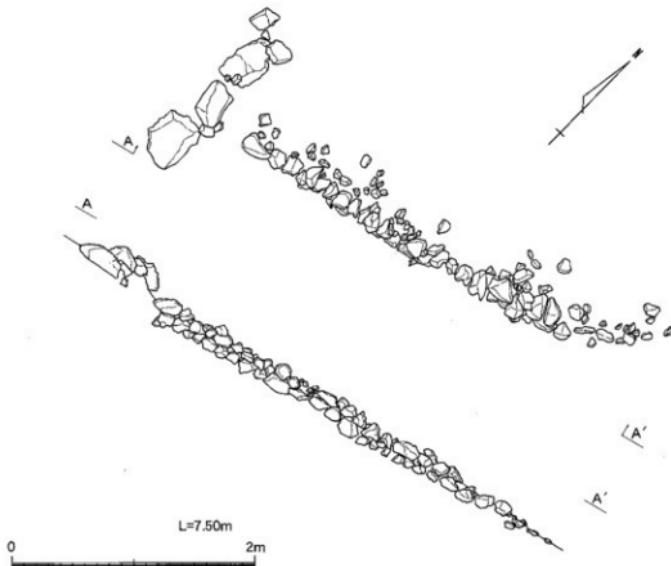
土坑は調査区東半に3基が検出された。このうち特徴的な2基について次に説明を加える。

#### 土坑 SF102

C 5 グリッド杭付近で検出された。平面形状が一辺が約4.8mの方形状を呈し、深さは4～9cmを測る。南側は掘り込みが浅く、立ち上がりはほとんど検出されなかった。覆土内には多量の葦が敷き込まれたような状況で含まれていた。遺物は出土していない。

#### 土坑 SF103 (第10図)

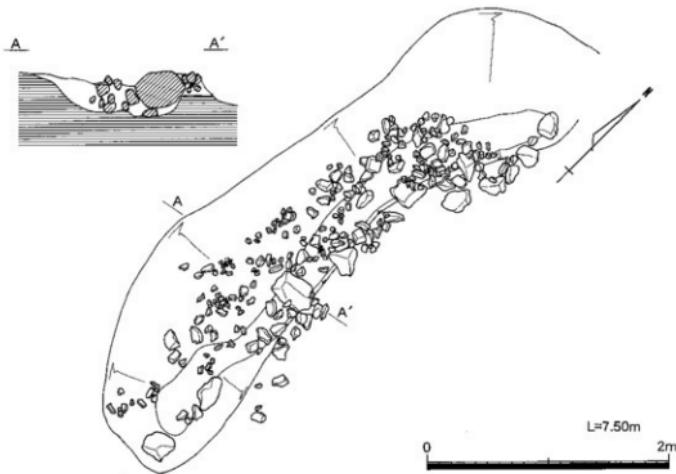
C 4 グリッドでSF102に西側の上端の一部を切られた状況で検出された。東側も攪乱に切られてい



第9図 石垣遺構 SX102実測図

| 遺構番号  | 形 状 | 大きさ     | 深さ   | 遺構番号  | 形 状 | 大きさ     | 深さ   | 遺構番号  | 形 状 | 大きさ     | 深さ   |
|-------|-----|---------|------|-------|-----|---------|------|-------|-----|---------|------|
| P 101 | 円 形 | 37cm    | 11cm | P 112 | 楕円形 | 25×29cm | 9cm  | P 123 | 楕円形 | 13×21cm | 9cm  |
| P 102 | 円 形 | 21cm    | 7cm  | P 113 | 楕円形 | 27×31cm | 6cm  | P 124 | 楕円形 | 28×33cm | 9cm  |
| P 103 | 円形? | 25cm    | 12cm | P 114 | 楕円形 | 28×31cm | 35cm | P 125 | 円 形 | 43cm    | 13cm |
| P 104 | 円 形 | 16cm    | 9cm  | P 115 | 楕円形 | 31×36cm | 12cm | P 126 | 楕円形 | 38×48cm | 26cm |
| P 105 | 円 形 | 36cm    | 10cm | P 116 | 円 形 | 23cm    | 7cm  | P 127 | 楕円形 | 16×22cm | 6cm  |
| P 106 | 楕円形 | 34×42cm | 10cm | P 117 | 円 形 | 25cm    | 4cm  | P 128 | 楕円形 | 17×20cm | 7cm  |
| P 107 | —   | —       | —    | P 118 | 楕円形 | 45×71cm | 23cm | P 129 | 楕円形 | 41×50cm | 17cm |
| P 108 | 楕円形 | 18×21cm | 5cm  | P 119 | 円 形 | 22cm    | 7cm  | P 130 | 楕円形 | 47×50cm | 18cm |
| P 109 | 楕円形 | 21×26cm | 4cm  | P 120 | 楕円形 | 15×18cm | 8cm  | P 131 | 楕円形 | 15×20cm | 3cm  |
| P 110 | 円 形 | 31cm    | 10cm | P 121 | 楕円形 | 15×23cm | 7cm  | P 132 | 円 形 | 46cm    | 10cm |
| P 111 | 円 形 | 12cm    | 4cm  | P 122 | 楕円形 | 23×27cm | 16cm | P 133 | 円 形 | 36cm    | 16cm |

第3表 ピット計測表



第10図 土坑 SF 103実測図

るため正確な規模は分からぬが、現存する規模では長さ5m、幅1m、深さ40cm程度の細長い土坑に人頭大～拳大の礫が詰められている。SR101に平行しているため、護岸のひとつと考えられる。

遺物は灰釉系陶器と近世磁器が出土している。

灰釉系陶器には碗がみられる（第11図-8）。底部片で、断面三角形の外側に潰れた稜線痕が端部に顕著に付く高台をもつ。底部外面には糸切り痕を残し、底部と体部の境には整形時に両者を接合した痕跡が観察される。13世紀前半の常滑産と思われる。

近世磁器は18世紀代の肥前産のいわゆるくらわんか茶碗が出土しているが細片のため図示できなかった。

#### 4 包含層の遺物（第11図-9～21）

I層とIII-13層から遺物が出土している。その他の層からは自然木が流れ込むようにみられた以外には遺物は出土していない。



第11図 1-2区 出土遺物

| 埠區番号  | 出土位置    | 名 称     | 口径(長さ) | 底径(幅) | 高さ(厚さ) | 埠區番号  | 出土位置        | 名 称     | 口径(長さ) | 底径(幅) | 高さ(厚さ) |
|-------|---------|---------|--------|-------|--------|-------|-------------|---------|--------|-------|--------|
| 11- 1 | S R101  | 灰釉陶器 瓢  | —      | 7cm   | —      | 11-12 | B 5 II-13層  | 灰釉陶器 瓢  | —      | 8.0cm | —      |
| 11- 2 | +       | 灰釉系陶器 瓢 | —      | 6.7cm | —      | 11-13 | C 5 II-13層  | 灰釉陶器 瓢  | —      | 6.2cm | —      |
| 11- 3 | +       | 近世陶器 盆  | 16.9cm | 6.2cm | 2.5cm  | 11-14 | B 5 II-13層  | 灰釉陶器 瓢  | —      | 7.0cm | —      |
| 11- 4 | +       | 近世陶器 丸碗 | —      | 4.4cm | —      | 11-15 | 試掘 I 層      | 中世陶器 盆  | 11.8cm | 4.9cm | 3.0cm  |
| 11- 5 | +       | 近世陶器 丸碗 | —      | 4.4cm | —      | 11-16 | 試掘 I 層      | 中世陶器 花瓶 | —      | —     | —      |
| 11- 6 | +       | 灰釉系陶器 壺 | —      | —     | —      | 11-17 | 試掘 I 層      | 近世陶器 瓢  | 10.0cm | —     | —      |
| 11- 7 | +       | 灰釉系陶器 瓢 | —      | —     | —      | 11-18 | B 4 I 層     | 不明金屬製品  | 7.8cm  | 0.7cm | 0.6cm  |
| 11- 8 | S F103  | 灰釉系陶器 瓢 | —      | 8.4cm | —      | 11-19 | B 4 I 层     | 石製品 瓶   | 5.9cm  | 4.5cm | 0.6cm  |
| 11- 9 | B 3 I 层 | 土師器 坏   | 12.0cm | 6.4cm | 3.4cm  | 11-20 | B 5 II-13層  | 木製品 下駄  | —      | 8.4cm | 3.5cm  |
| 11-10 | B 4 I 层 | 灰釉系陶器 瓢 | —      | 7.6cm | —      | 11-21 | B 5 III-13層 | 木製品 帽串  | —      | 0.8cm | 0.2cm  |
| 11-11 | B 6 I 层 | 灰釉陶器 瓢  | —      | 7.0cm | —      |       |             |         |        |       |        |

表4 1-2区 遺物一覧表

### I層出土の遺物

I層からは土師器、灰釉陶器、灰釉系陶器、陶磁器、金属製品、石製品が出土している（第11図9～11・15～19）。

土師器には奈良時代の坏がみられる（9）。外面に指頭痕が部分的に観察できるほかは磨滅しており、詳細な調整方法は判然としない。

灰釉陶器には碗がみられる（11）。爪形の高台が付き、底部外面の中央部には糸切り痕を残す。折戸53号窯式に並行する東遠江産のものと思われる。

灰釉系陶器には碗がみられる（10）。鈍った爪形の高台が付き、底部外面には全面に糸切り痕を残す。灰釉系陶器の初期段階の東遠江産のものと思われる。

陶器には皿と花瓶がみられる。皿（15）は高台が糸切り後に削り出されているが極めて低く形骸化している。更に底部外面にはヘラ描きによる「〇」印が付けられている。口縁部にのみ灰釉が掛けられており、内面の見込み部分には3箇所の目あとが残っている。花瓶（16）は胴部片である。外面の全面に鉄釉が掛り、内面には頸部との接合痕が顕著に残る。いずれも16世紀代の瀬戸・美濃産である。

磁器には碗（17）がみられる。いわゆるくらわんか茶碗で、体部外面に草木文の一部が観察できる。18世紀中頃の肥前産である。15～17は試掘調査の際に出土した遺物で、層位の検討の結果I層下面から出土したものと解釈した。

金属製品は用途不明のものである（11～18）。細長い鋼板の中央に齒車状のものが取り付けられている。鋼板の両端は穿孔してあり、釘などで止めて使われたとみられる。飾り金具のひとつであろうか。

石製品には粘板岩製の硯がみられる（11～19）。小型でかつ薄手のもので使用によって硯面が摩滅して凹んでいる。

### III-13層出土の遺物

III-13層からは灰釉陶器、白磁、木製品が出土している（第11図-12～14・20・21）。灰釉陶器には碗がみられる（11-12～14）。12は断面二等辺三角形状の高台をもち、体部下半をヘラ削りする。底部外面には糸切り痕を残している。折戸53号窯式に並行する東遠江産のものと思われる。13は断面爪形の高台をもち、底部外面には糸切り痕を残す。内面には部分的に灰釉（自然釉か）が観察される。折戸53号窯式に並行する尾張～三河産のものであろうか。14は断面3角形状の高台をもち、底部外面は糸切り痕をナデ消している。百大寺窯式に並行する三河産のものであろうか。

白磁（図版13）は小片で図示できなかった。碗の胴部下半の破片である。

木製品には下駄と簞串がみられる（11-20・21）。

下駄（20）はいわゆる路傍下駄で、片方の先端部のみが出土した。鼻緒の穴がやや右側に開くことから左足のものと思われる。

簞串は基部のみ出土した（21）。一端を山形に削り、更に側縁を切り欠くことによって頭部を造り出している。反対側の端は折れて失われている。

## 第2節 4-1区の調査

### 1 概要

4-1区は丘陵の裾部にあたり、隣接する4-2区とは現地表面で2~4mの比交差を測る。

遺構は山土や碎石による盛土層、旧耕作土を除去した後検出された。石垣によって区画された畑遺構や集石遺構、水路などがみられる。

遺物は遺構内から出土したものがほとんどで、江戸時代後半～末のものが大多数を占める。このことから江戸時代後半以降に土地利用が開始されたと考えられる。遺物の中には比較的発見が多くみられることから、今回は検出されなかつたが、甕を利用した水溜や肥溜などの施設が近在することも考慮される。また、その他には古墳時代後期の坏身（高坏か）片が1点みられ、近接して古墳時代の遺跡の存在が推測される。

### 2 土層の状況（第13図）

土層は最深部で現地表面から1.1mまで確認された。現地表面は山土や碎石による盛土によるもので、その直下に位置する旧耕作土以下をI層～とした。

I層は灰黄褐色土層で極めて固く締っている。

II層は直径1~5cm程度の礫を多く含む黒褐色土層で、I層と同様に極めて固く締っている。

III層は拳大の礫を多く含む灰黄褐色土で、I、II層に比べ若干締まりに欠ける。

SX101の集石部分が営まれる下位にIII層が位置し、その北側地域にI層、南側地域にII層が分布する。I、II層がともにIII層に乗っていることや、含まれる礫の粗密からこれらの層の組成を考えると、開墾される際に土中から拾い上げられた礫の捨て場（集石遺構SX101）となつた下が耕作されずに残った部分（III層）、より細密に礫が拾われて耕作土として利用された部分（I層）とあまり拾わないうちに耕作土となった部分（II層）とに整理することができよう。

IV層は直径1~3cm程度の礫を含む黒褐色土層で固く締っている。

V層は均質な茶褐色土層で、東側にゆくにしたがってシルト質になる。

VI層は黄褐色の粒子を含む茶褐色粘土層である。固く締っている。

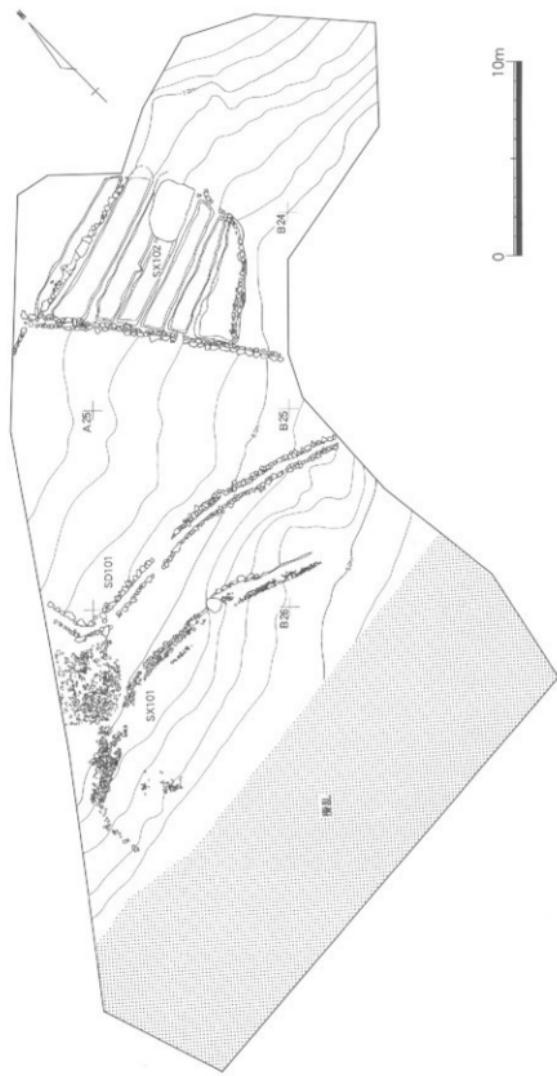
VII層は直径3cm前後の礫を含む茶褐色土層である。固く締っている。

IV~VII層はSX101付近のトレンチで確認された層位で、いずれにも遺構、遺物がみられなかつたため自然堆積層と判断した。

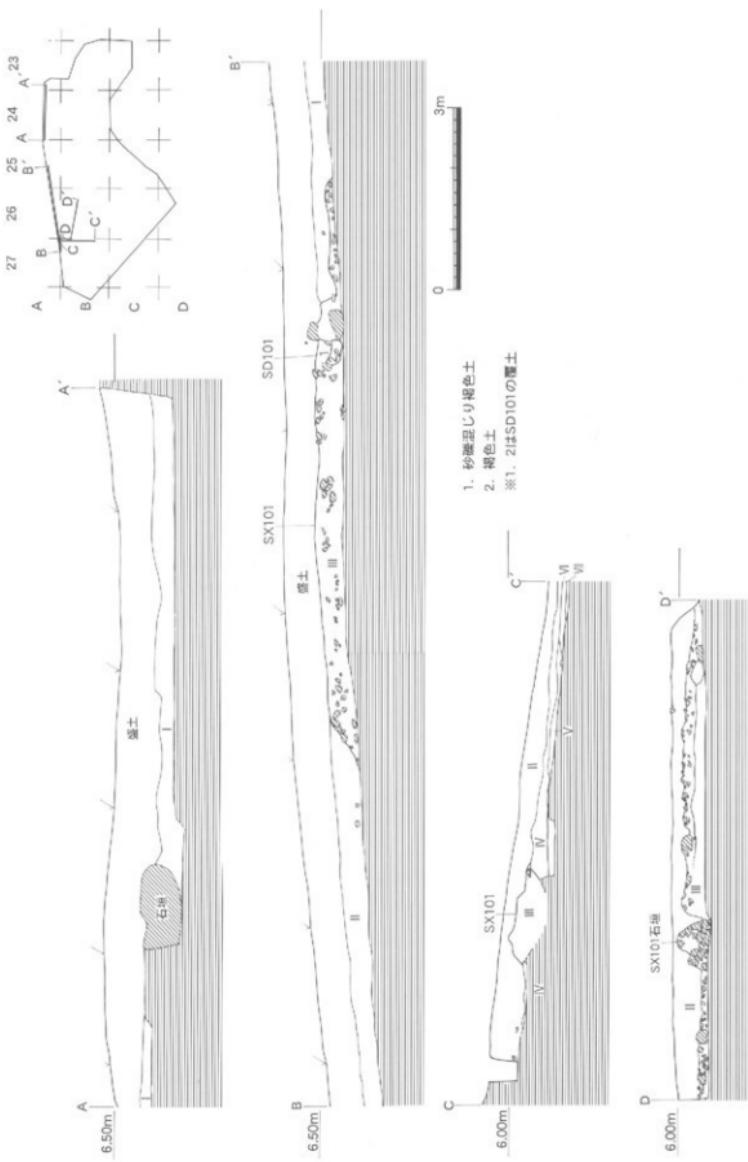
### 3 遺構と出土遺物

#### 集石遺構SX101（第14図、図版7）

水路遺構SD101の南側で検出された江戸時代後半に作られたとみられる集石遺構である。ほぼ方形の範囲の集石部分とその南西側に続く帯状の集石部分、南東側に続く石垣部分からなるが、それぞれが継続して有機的に関わっていると考えられるためここではまとめて集石遺構として取り上げた。集石部分は主に拳大の礫からなる。周辺を開墾し耕作地として利用するにあたって邪魔になる礫を拾い集めてここに捨てたため形成されたものと前述の土層の状況からも考えられる。帯状の集石部分の頂部は比較的平坦で、道として利用されていたことも考えられる。先端は4-2区で検出されたSD101と直交す



第12図 造構全体図



第13図 4—1区の土層状況

る方向へ折れて下っていることから水田地域の地割りの影響を受けていることが察せられる。石垣部分は集石部分から東～南東側に、SD101とはほぼ平行に築かれている。石垣は人頭大の礫を主体に組まれており、標高の比較的高い西側より4～2段に積まれている。裾部には拳大の礫が敷かれており、帯状の集石部分の継続と考えられる。

以上をまとめてみると、石垣は耕作地の区画をなし、その下側（外側）に礫を敷いて、農地への往来に使われていたとみられる道が巡っていた景観が再現できる。石垣や道で区画された耕作地内は、全面が利用されていたのではなく、一部分を礫の捨て場として確保し耕作土内の礫を漸次そこへと取り除くことによって、より良い畑を作ろうとしていたことが伺える。

この畑の区画は昭和初期に作成された地籍図に記載されておらず、それ以前の何れかの時期に廃絶して、耕作土下に埋没していたことが推測される。

遺物は集められた礫に混じって中・近世陶磁器が出土している（第17図-11～13）。11は瀬戸・美濃産の皿である。口縁部に灰釉が施され、内面は部分的に垂れている。口唇部外面には重ね焼きによる着色の跡が認められる。16世紀代のものと思われる。12は擂鉢である。口縁部は折り返され、肥厚している。内外面に褐色の釉がかかる。13は肥前磁器の皿である。内面には2条の同心円が施され、その中に龍の文様の一部がみられる。18世紀前半のものであろう。

#### 烟遣構 SX102 (第15図、図版6)

B22グリッドを中心に検出された石垣による区画をもつ江戸時代末～明治初頭に作られた烟遣構である。畑の耕作土下には幅0.9～2.3m、深さ14～33cmを測る溝が平行して7条検出された。溝の中には礫が充満しており、耕作土中の礫を埋め込んで処理しているものと考えられる。この溝を囲んで3方に石垣や石列がみられるがいずれも溝上にかかっている部分があるため、溝を掘削し埋め戻す際、あるいは埋め戻した後に築いていることが伺える。北側から1条目と2条目の溝の間にある東西方向の石列は更にその西側にみられる石垣の延長上にある。人頭大～抱え大の石からなり、石が抜かれている部分や2段目まで積まれている部分もみられるため、元来石垣として築かれていたものが、畑の拡張など、区画が不必要になるなんらかの要因で上部が取り去られ耕作に支障のない基部が部分的に残ったものと考えられる。溝の西側に築かれている南北方向の石垣は人頭大の礫を用いて2～3段に積まれている。南側の石列は人頭大～拳大の礫を弧状に並べ、部分的に2段に積み重ねてある。この部分は石垣になる確証は得られなかった。これらの石を用いた施設はひとつの畑を区画する目的で築かれていると解釈できる。

この3者の石垣、石列のうち南北方向のものと南側の弧状のものは昭和初期の地籍図に記載されている。一方で北側に検出された東西方向の石列は記載がなく、すでに地籍図が製作された時点には埋没していたことが伺える。

遺物は溝内から近世陶磁器が出土している（第17図7～10）。

陶器には秉燭、甕がみられる。秉燭（8）は瀬戸・美濃産で内面にのみ鉄釉を掛ける。外面底部は糸切り未調整で、脚部には部分的に灰釉がみられる。19世紀前半のものと考えられる。甕（9）は常滑産のもので、底部片である。外面には底部と胴部の接合の際の指頭痕が顕著に観察される。

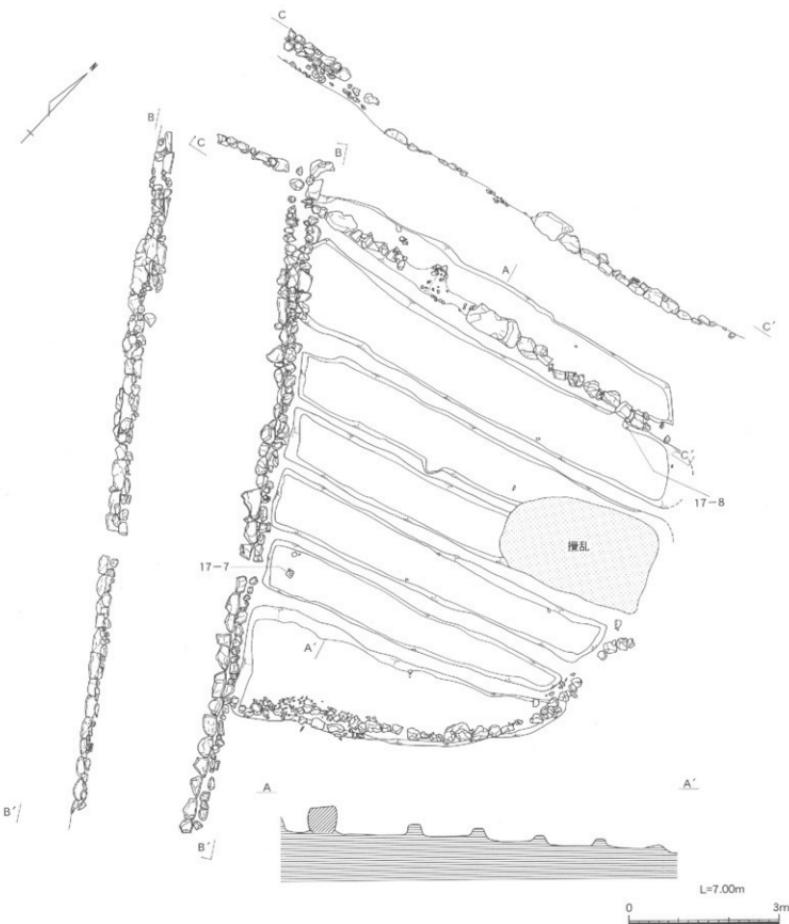
磁器には鉢と碗がみられる。鉢（7）は見込みに山水文を描き口唇部に鉄釉を施す。高台は蛇の目高台で更に中央に凹みを付ける。碗（10）はいわゆる広東茶碗で高台外面と体部との境に平行する線を引く。体部の文様は一部がみられるが何かは判然としない。何れも19世紀後半のものと考えられる。

#### 水路遣構 SD101 (第16図、図版5)

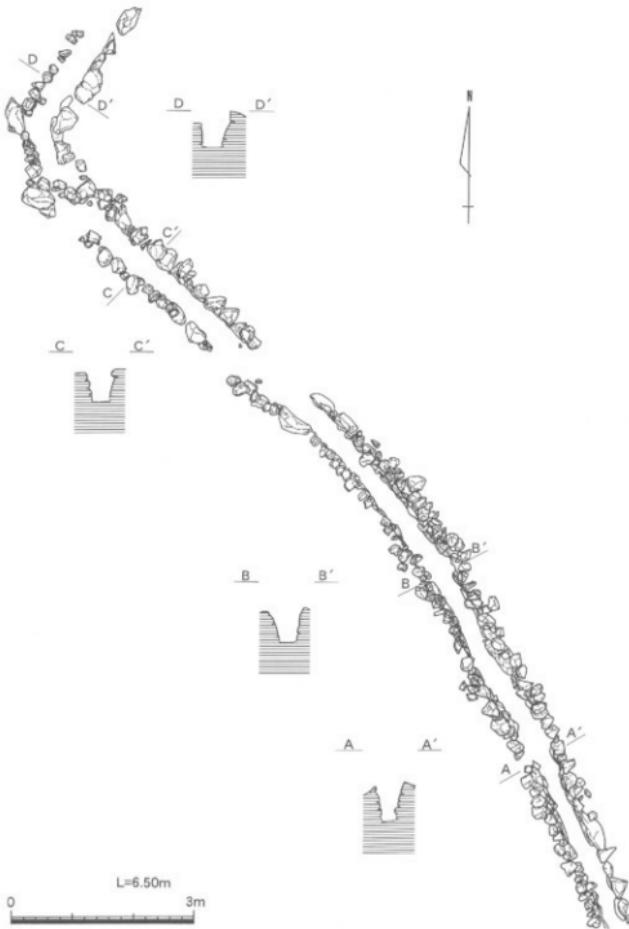
A23グリッドからC23グリッドにかけて検出された両岸を石で護岸される、江戸時代末に築かれたと思われる水路である。調査区を東西に横切っており、北側から流下してきたものがL字状に西向きに曲がり、やや南にカーブしながら調査区外に延びている。規模は幅30～50cm、深さ34～68cmを測り、両岸



第14図 集石造橋 SX 101実測図



第15図 煙道構 SX102実測図



第16図 水路遺構 SD 101実測図

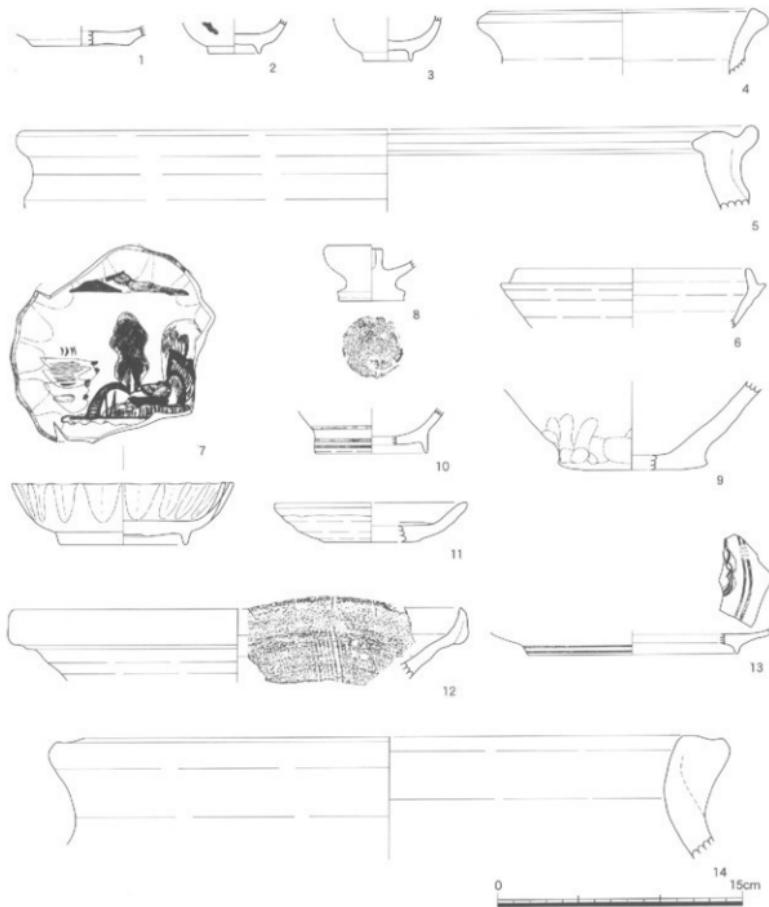
は人頭大の礫を3~5段組んで護岸としている。

遺物は須恵器、中・近世陶器、近世磁器などが出土している(第17図-1~6)。

須恵器は坏身(高环の坏部か)が出土している(6)。小片で混入品である。直径14.4cmを测りやや深めなもので、受け部もしっかりしていることから6世紀中頃のものと思われる。

中・近世陶器には皿と壺がみられる(1・4・5)。

皿は瀬戸・美濃産の底部品で、全体に灰釉が厚くかかる(1)。見込み部分に花弁状の陰刻を施すほか、底部外面には「L」字状のヘラ描きが観察される。また、底部外面には目あとが2箇所残されてい



第17図 4-1区 出土遺物

る。16世紀前半のものと思われる。

甕は常滑産の口縁部である(4・5)。4は折り返しのないもので極めて焼きが悪い。5は折り返し部分は薄い上に口縁部と密着し、視覚的には単に口縁部が肥大しているように感じられる。

近世磁器には丸形の湯飲みがみられる(2・3)。2には文様の一端がみえるが何になるのか判然としない。19世紀後半のものであろう。

この水路は昭和初期に製作された地籍図にも記載されていることや、覆土上面には鉄屑やガラス塗が混入していることからも、江戸時代末に築かれて以降、水路としての機能が失われた後のごく最近まで地表面に現れていたことが伺える。

| 検査番号  | 出土位置   | 名 称      | 口径(長さ) | 底径(幅) | 高さ(厚さ) | 検査番号  | 出土位置   | 名 称     | 口径(長さ) | 底径(幅)  | 高さ(厚さ) |
|-------|--------|----------|--------|-------|--------|-------|--------|---------|--------|--------|--------|
| 17- 1 | S D101 | 近世陶器 壺   | —      | 6.0cm | —      | 17- 8 | S X102 | 近世陶器 乗堀 | —      | 4.0cm  | —      |
| 17- 2 | +      | 近世陶器 湯飲み | —      | 3.2cm | —      | 17- 9 | +      | 近世陶器 壺  | —      | 9.2cm  | —      |
| 17- 3 | +      | 近世陶器 湯飲み | —      | 3.0cm | —      | 17-10 | +      | 近世磁器 瓢箪 | —      | 7.0cm  | —      |
| 17- 4 | +      | 近世陶器 壺   | 16.0cm | —     | —      | 17-11 | S X101 | 近世陶器 壺  | 12.0cm | 5.6cm  | 2.4cm  |
| 17- 5 | +      | 近世陶器 壺   | 46.0cm | —     | —      | 17-12 | +      | 近世陶器 掘鉢 | 27.6cm | —      | —      |
| 17- 6 | +      | 須恵器 坏身?  | 14.4cm | —     | —      | 17-13 | +      | 近世磁器 壺  | —      | 13.0cm | —      |
| 17- 7 | S X102 | 近世磁器 鉢   | 13.6cm | 7.8cm | 3.8cm  | 17-14 | B24 Ⅱ層 | 近世陶器 壺  | 42.0cm | —      | —      |

第5表 4-1区 出土遺物一覧表

#### 4 包含層の遺物 (第17図-14)

常滑産の壺(14)がみられる。Ⅱ層出土で、耕作により混入したものと考えられる。口縁部は折り返され肥厚している。折り返しの端部はナデられ、滑らかに仕上げられている。19世紀後半のものであろう。

### 第3節 4-2区の調査

#### 1 概要

4-2区は今回の調査で最も標高の低いところに位置する。調査の前年までは一面水田として利用されていた。現在みられる畦畔は昭和53年頃に国道150号バイパスの開通にあわせて改修されたもので、試掘調査により、過去の水田が埋没していることが把握されていた。

遺構はⅡ・Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層の上面で検出された。Ⅱ・Ⅲ層とⅣ層、Ⅵ層の上面では水田への給水に利用されたとみられる江戸時代～昭和前半、室町時代末の水路遺構が検出されている。それぞれは平面ではほぼ同位置・同方向に走っており、Ⅴ層の堆積を乗り越えて水路の通される位置が踏襲されていることが確認された。Ⅳ層上面で検出された畦畔もこの水路に直交するものであり、水路の方向と畦畔とが土地の区画上密接な関係にあったことが伺える。また、Ⅳ層、Ⅴ層の上面で検出された土坑は砂や礫を覆土とするものがみられた。口の開いていない観が含まれるものもあり、水路内に溜まった砂や礫を浚渫し片付けるために掘られたものと考えられる。

#### 2 土層の状況 (第16図)

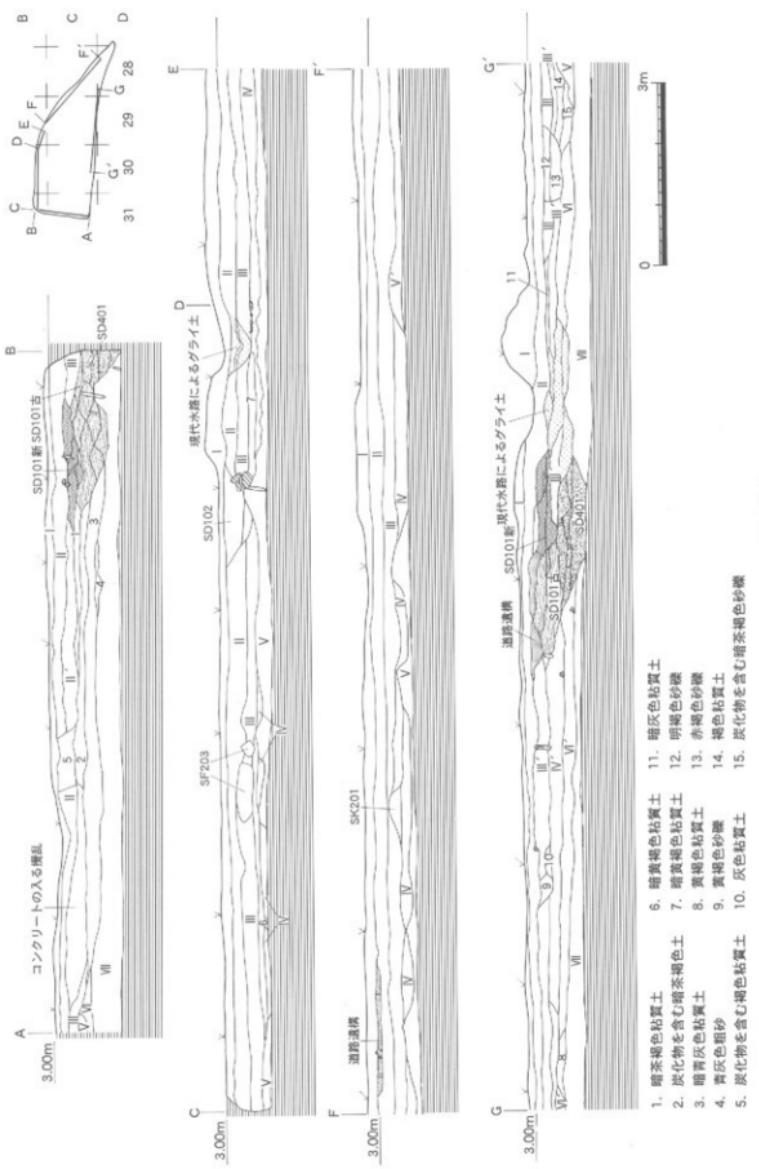
4-2区で確認された土層は現地表面(標高3.2m付近)から約1.2m下(標高2.0m付近)までである。この中は基本的に7層に分けることができ、上位からⅠ～Ⅶ層の名称を付けた。

最上層である表土は灰褐色を呈する粘質土で10～20cmの厚さを測る。調査の前年までは水田耕作土として耕作が行なわれており、この層をⅠ層とした。明治～最近の陶磁器片が若干量出土したが、より古い遺物は全くみられなかった。

Ⅱ層は粘性の強い暗茶褐色砂質土でⅠ層の鈍層となっていた。30～10cmの厚さを測り、上面で道路遺構、水路遺構(SD102)、溝状遺構が検出された。Ⅰ層の薄い部分では耕作土としても利用されていたほか、全体に稻株や根が深く入り多くの部分に擾乱が及んでいることが確認された。この層からは近世～近代の陶磁器片が若干出土したが、擾乱されている部分は調査当初に部分的にⅠ層と同時に人力でよって除去した。

Ⅲ層は鈍い黄褐色粘土層で、上面で水路遺構を検出した。この遺構はⅡ層を先行して除去した部分から検出されており、報告中ではⅡ・Ⅲ層上面検出遺構として括して取り上げた。

Ⅳ層はオリーブ色味を帯びる黒色粘質土層で、上面で土坑と畦畔を検出した。この層は畦畔に伴う水田耕作土と考えられ、同時に検出された土坑はこの層の耕作終了後に掘られており、Ⅲ層上面から掘り



第18図 4-2区の土層状況



第19図　Ⅱ・Ⅲ層上面検出遺構全体図

込まれた可能性も考えられる。

VI層は鈍い茶褐色粘質土層で、上面で土坑を検出した。これらの土坑は上面に位置するIV層が耕作土として機能していた期間内にIV層上面から掘り込まれた可能性も考えられる。

VI層は青灰色粘質土を含む鈍い茶褐色粘質土で、上面で水路遺構を検出した。

VII層は暗青灰色粘質土で、無遺物層である。

### 3 遺構と出土遺物

#### (1) Ⅱ層・Ⅲ層上面検出遺構

##### 道路遺構

C29グリッドを中心に南北方向に走る昭和前半頃の道路であり、水路遺構 SD101が埋まつた後に築かれている。近代の遺構であるがSD101に直交するする位置にあり、土地利用の変遷をみる上で興味深いため参考までに取り上げた。幅は2.2~3.0mを測り、I層の耕作によって上面は攪乱されているが、明るいオリーブ色がかる灰色粘質土を張って路面を確保している様子を伺うことができた。

遺物は粘質土中から昭和17年の10銭アルミ貨が出土している。

##### 水路遺構 SD101 (第21図、図版8)

C30グリッドからB31グリッドにかけて検出された江戸時代に築かれた直線状の水路遺構である。南側が昭和後半の溝によって攪乱されているため幅は判然としない。流れの方向は底面の標高から東から西であると思われる。溝は両岸に杭を列状に打ち込み、板材や丸太材を渡して護岸をしているが、渡してある材は流出したり腐敗したと思われ最上部の一部以外はほとんど残っていないかった。SD102との接続部分には人頭大の礫が並べられている。元来はSD102内に検出された石列と連結していたのであろうか。

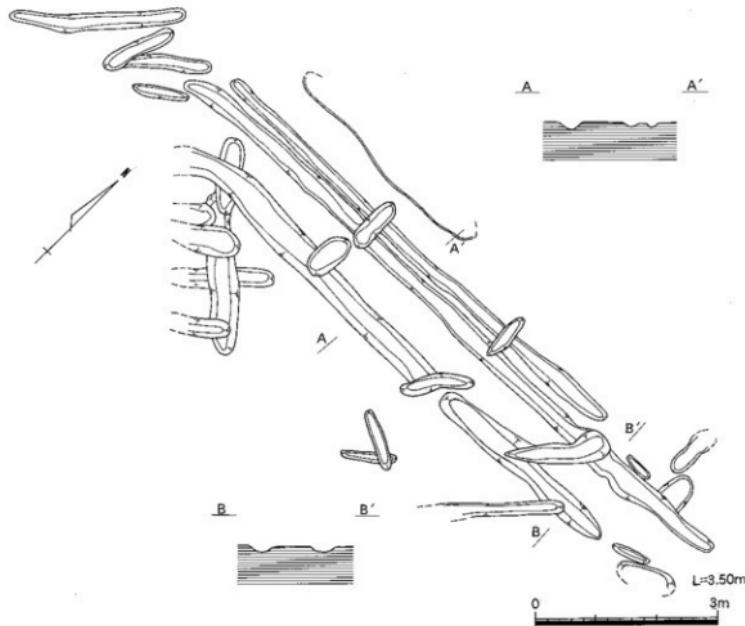
杭列は4条検出され、少なくとも2時期の溝1条ずつがほぼ同位置に重複している。この2条の溝は覆土が類似しているために分離できずに掘り上げてしまったが、土層断面の状況から判断してより新しいもの（SD101新）がⅢ層上面に、より古いもの（SD101古）がIV層上面に立ち上がることが調査後に判明した。よってSD101古はIV層上面遺構であるが、遺物も分離できなかつたためここに一括して記載した。遺物の様相から推測するとSD101古は江戸時代前半に、SD101新は後半～末に築かれたものと考えられる。

遺物は覆土内から近世陶器と木製品が出土している（第28図-1～6・21）。

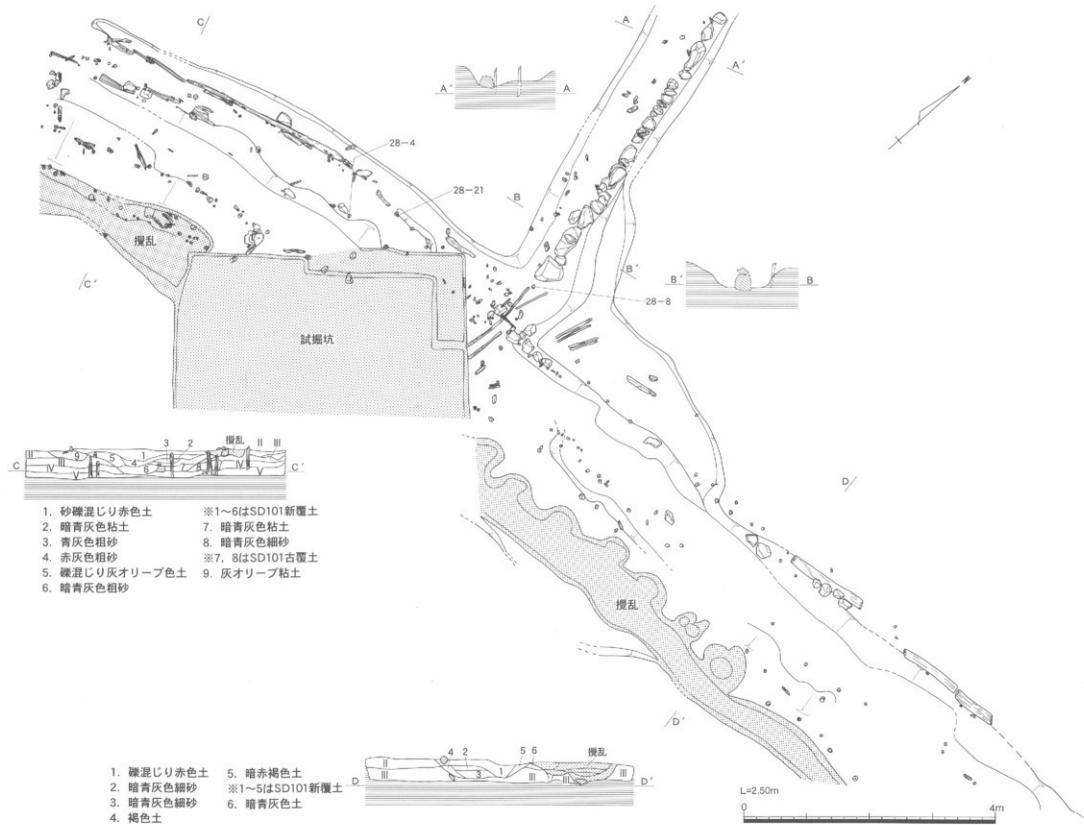
1は志戸呂産と思われる碗である。底部外面はロクロ上でケズられ、しっかり付く高台は端部に平坦面をもつ。釉は観察できない。17世紀代のものと思われる。2は瀬戸・美濃産の丸碗である。内外面にはやや白濁した長石釉を掛け、特に内面には嵌入が密に入っている。18世紀前半のものと思われる。3は灯明受皿である。内面と外面口縁部に薄い緑色の釉を掛ける。产地は判然としないが半ば磁胎で特徴的である。4は瀬戸・美濃産の皿である。内面には鉄釉で蘭竹文を描き、更に長石釉を全面に掛けた。見込みには重ね焼きの際の着色が観察される。17世紀後半のものと思われる。5は土錘である。らっきょう状を呈する寸胴なもので穴には芯の痕跡が薄く残る。6は常滑産の甕である。口縁部は折り返されて肥厚し、端部はナデられ滑らかに仕上げられている。江戸時代末頭のものであろうか。21は路傍下駄である。両側縁が欠損しているうえに腐蝕が進んでおり、詳細な調整方法は観察できない。

#### 水路遺構 SD102（第21図、図版8）

B30グリッドからC30グリッドにかけて検出された水路遺構である。SD101新に連結するものと思われる。幅1.2～2.0m、深さ15cm～40cmを測り、中には護岸用に用いられたと思われる杭が打ち込まれているが、列状に並ばないものがあるため、補修などにより複数時期のものが混じっていると思われる。また、東岸には拳大～人頭大の礫を用いた石列が検出された。下部に沈下防止と思われる杭を打ち込み（図版8）、部分的に2段に積まれている箇所も見受けられるため、元来は石垣状のものであった可能性も考えられる。石列の延長上にあるSD101との接続部分には長さ55～138cmの芯持ちの棒材が横たえ



第20図 溝状遺構実測図



第21図 水路構造 SD 101・102実測図

られている。

遺物は覆土内から灰釉系陶器と近世陶器が出土している（第28図-7・8）。

7は瀬戸・美濃産の小型の碗である。内面と体部外面には灰釉がかかる。8は東遼江産の灰釉系陶器の碗である。断面三角形状の高台は形體化しており、底部外面には糸切り痕を残す。13世紀前半のものと思われる。

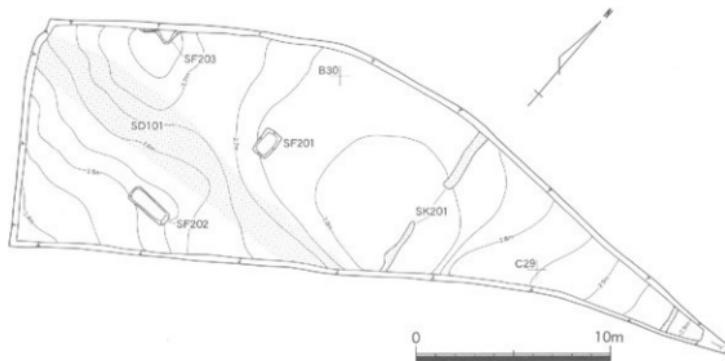
#### 溝状遺構（第20図）

C28グリッドを中心にして検出された。規模は東西方向に平行するものが最も長いが、あとはまちまちであり、幅についても20~55cm、深さも5~12cmと一定ではない。東西方向のものとそれに直交するもの、東西方向からやや北側に偏心するものとそれに直交するものがそれぞれセット関係になると考えられるが、切り合ひ関係からは時期差を伺うことはできなかった。耕作に関わるなんらかの痕跡と思われるが、遺物も出土せず性格の把握はできなかった。

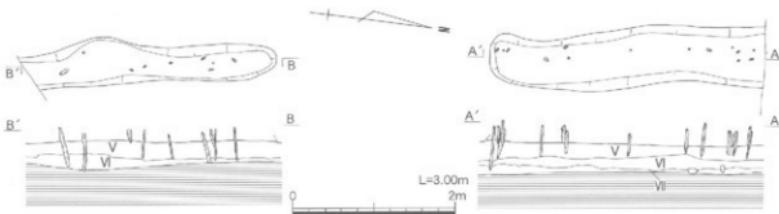
#### （2）IV層上面検出遺構

##### 畦畔SK201（第23図、図版9）

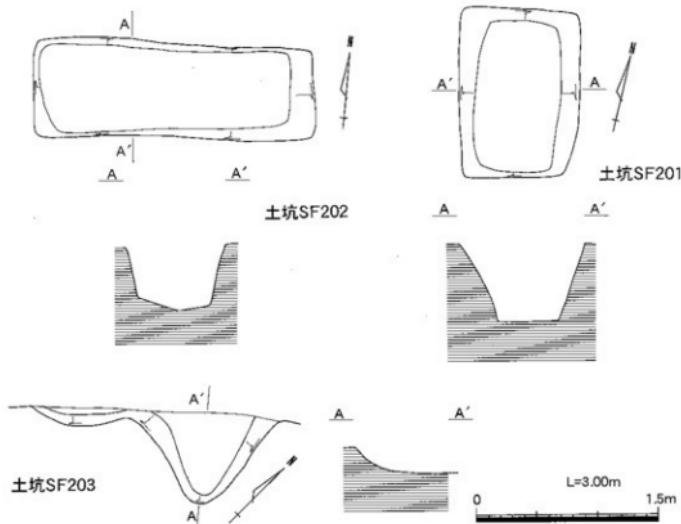
調査区中程で、南北方向に検出された畦畔である。SD101古に直交する位置にあり、同時期のものと考えられる。幅24~60cmを測り、上層断面では20cmの高さで確認することができたが、平面的には2~5cm程度の高まりとして検出されたに留まった。中央部には補強のために打ち込まれたと思われる杭が列状に伴っている。また、中間に約2.7mの間隔で高まりの検出されなかつた箇所がみられ、この部



第22図 IV層上面検出遺構全体図



第23図 畦畔SK201実測図



第24図 土坑実測図

分には水口などの施設の存在も想定できる。

畦畔とみられる杭列は調査区東端でも検出されている。検出された長さは約1.3mでSK201のように盛土は検出されなかったため、幅や高さは判然としない。SK201と平行することから同時期に存在したものと思われる。

#### 土坑 SF 201 (第24図、図版9)

C30グリッドで検出された平面形状が長方形を呈する土坑である。規模は長辺1.4m、短辺1.0m、深さ63cm前後を測る。覆土は褐色味を帯びた灰色砂礫を主体とし、口の開いていない観が多数含まれていた。遺物は近世陶磁器が少量出土したが細片のため図示できなかった。

#### 土坑 SF 202 (第24図、図版9)

C30グリッドで検出された平面形状が長方形を呈する土坑である。規模は長辺2.3m、短辺0.83m、深さ56cm前後を測る。覆土はSF201と同様に褐色味を帯びた灰色砂礫を主体とし、口の開いていない観が多数含まれていた。遺物は近世陶磁器が少量出土したが、細片のため図示できなかった。

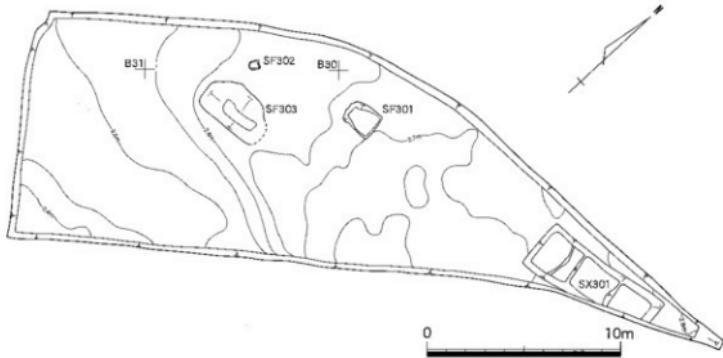
#### 土坑 SF 203 (第24図、図版10)

B30グリッドで検出された不定形の土坑である。調査区境に接するため明確な規模は判然としない。覆土は褐色粘質土で、遺物は特に出土しなかった。

### 3 V層上面検出遺構

#### 土坑状遺構 SX 301 (第26図、図版10)

C28グリッドからD28グリッドにかけて検出された平面形状が長方形を呈するものである。他の土坑と比べ規模や底面の掘られ方に差がみられるため土坑状遺構とした。規模は長辺7.1m、短辺2.7m、深さ0.8~1.6mを測る。底面は1.6~2.4mおきに著しい凹凸があり、大きく3つの部分に分かれるがこれか何を意図したのかは判然としない。覆土には拳大~人頭大の礫が多く含まれ、周囲の礫を埋め込ん



第25図 V層上面検出造構全体図

で処理するための施設とも考えられる。

遺物は覆土内から主に江戸時代の陶器と木製品が出土している（第28図9～12・20）。

9は灰釉陶器の皿と思われるが底部がことさらに凹む特異な形態を呈している。底部外面に糸切り痕を残し、内面はつるつるに摩滅している。東遠江産の最末期にあたるものであろうか。10は瀬戸・美濃産の碗（皿？）である。鉄軸で弧状に線を引くのは内面に一様に鏽跡がかかる。11は瀬戸・美濃産の灯明受け皿である。全体に薄い褐色の釉がかかる。18世紀後半のものと思われる。12は瀬戸・美濃産の皿である。全面に鉄軸がかかる。高台は削り出して、外面底部には目あとが1箇所残されている。16世紀後半のものと思われる。木製品には曲物の蓋板がみられる（20）。

#### 土坑SF301（第26図、図版11）

C29グリッドで検出された平面形態が長方形の土坑である。西側の壁には掘削時の工具痕が明瞭に観察された。規模は長辺1.8m、短辺1.45m、深さ1.1～1.3mを測る。覆土の最上層にのみ拳大の礫が含まれていた。

遺物は近世陶器と不明木製品が出土している（第28図-13・14・23）。

13は常滑産の甕である。口縁部は折り返されて肥厚しており、外面に2条の低い稜をもつ。内外面には鏽跡が掛けられる。口唇部は退化した断面「T」字状をなし、端部には自然釉がみられる。19世紀後半のものであろうか。14は小型の甕の底部である。全面に鏽跡を掛けた後、外面にのみ鉄軸を重ねて掛ける。23は一端を尖頭状に加工する棒で、反対側は欠損している。何らかの部材であろうか。

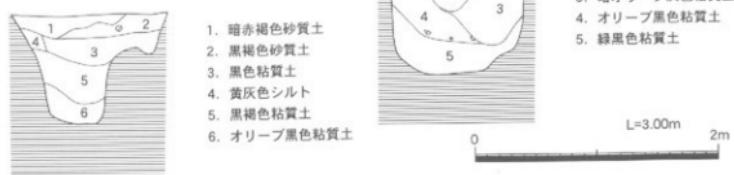
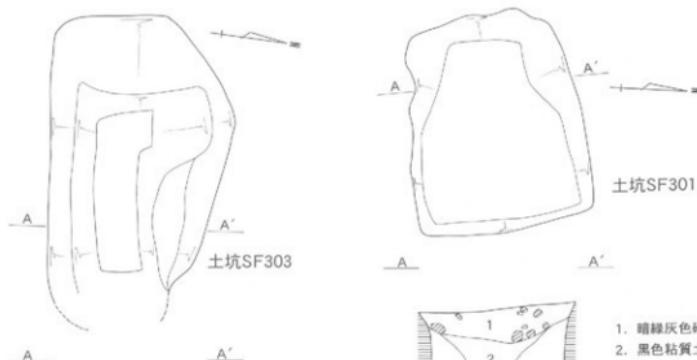
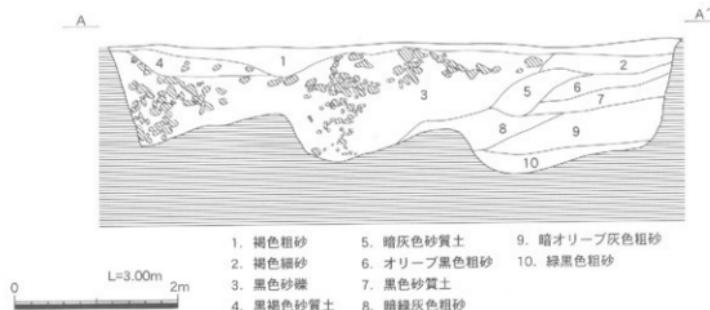
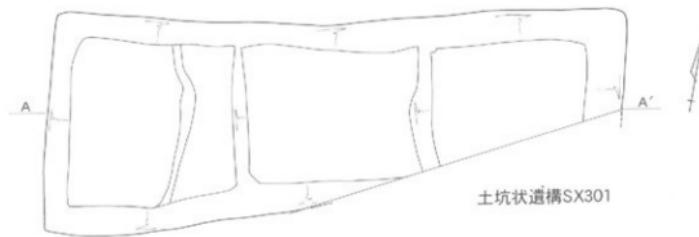
#### 土坑SF302（図版11）

B30グリッドで検出された小型の土坑（窪み？）である。プランがはっきりしなかったため、あえて図示しなかった。中から自然木の木片が出土している。

#### 土坑SF303（第26図、図版11）

C30グリッドで検出された不定形の土坑である。北面にはテラス状の段をもつ。規模は短辺2.25m、深さ1.35～1.4mを測る。長径方向はSF201によって切られているため判然としないが概ね4m程度になると思われる。

遺物は志戸呂産の丸碗が出土している（第28図-15）。外面底部の中央には糸切り痕を残し、体部外面上には鉄軸がかかる。17世紀代のものと思われる。



第26図 土坑実測図

#### (4) VI層上面検出遺構

##### 水路遺構 SD 401 (第29図、図版12)

C30からB31グリッドにかけて検出された室町時代末頃に築かれたと思われる水路遺構である。規模は幅0.4~1.6m、深さ31~76cmを測り、流れの方向は底面の標高から東から西であると思われる。溝はⅡ・Ⅲ層上面で検出されたSD101のほぼ真下に位置し、SD101と同様に両岸に杭を列状に打ち込み、板材や丸太材を渡して護岸をしているが、渡してある材は流出したり腐敗したと思われ最上部に位置するものが若干残る程度であつた。

また、SD101のような造り替えの様子はみられなかったが、杭列が千鳥状になる部分もあり、補修が施されていたとみることができる。

遺物は覆土内から中世末の陶器と木製品が、底面から動物遺存体が出土している (第28図-16・19・22、図版15)。

28-16は瀬戸・美濃産の皿である。内面と外面体部に灰釉を掛けるが、外面のものは部分的に底部まで垂れている。また、外面底部から腰部にかけて、黒色の樹脂状の付着物が観察される。体部には接着した部分を剥がした痕跡が残る。16世紀後半のものと思われる。

木製品には漆椀、不明品がみられる。19は漆椀である。内面に朱色、外面に濃い栗色の漆を掛け仕上げとしており、外面には桐?状の紋が入る。高台はほぼ鉛直方向に挽き出され、体部下半がやや厚手になっているのが特徴である。全体的に腐蝕が進んでおり、半分以上漆が剥落している。17世紀後半のものと思われる。22は用途不明のもので、両側縁から矩形の削り込みがなされている板材である。なんらかの部材であろう。

動物遺存体は大腿部のものと思われる骨が水路底面から出土した (図版12、15)。残念なことに今回の整理期間中には余裕がなく種の特定はできなかった。水路の掘削後まもなくなんらかの祭りにともなって沈め込まれたものであろうか。

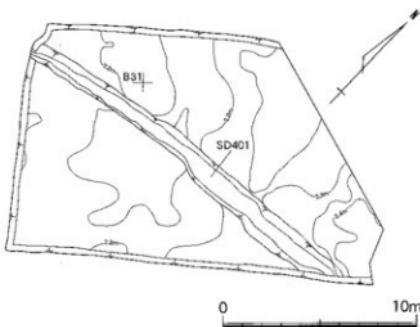
#### 4 包含層の遺物 (第28図-17、18、24)

「2 土層の状況」で述べたように I ~ V 層から遺物が出土しているが陶磁器類はほとんどが細片である。この中で全体の形状が図示できたものはIV層上面出土の鉄とV層出土の中世末の陶器、VI層上面出土の櫛である。

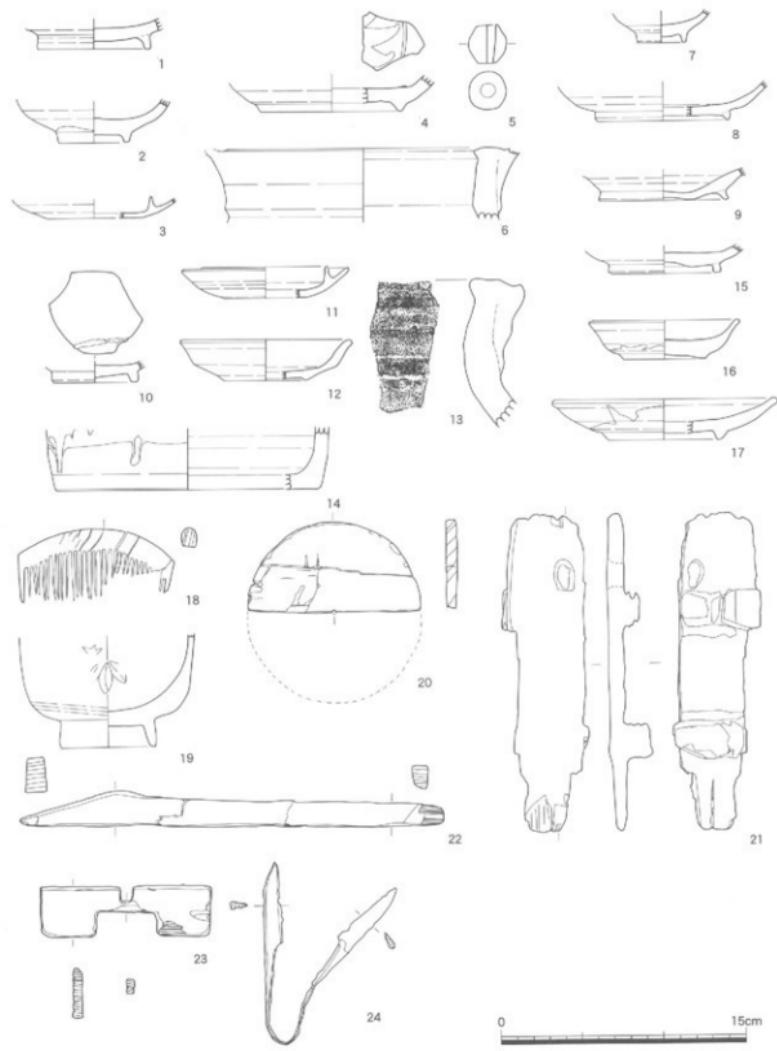
24は鉄製の握り鉄である。かなり錆びているが全体の形状をよく残している。握り部分から片方が外側へ折れ曲がって出土した。江戸時代後半~末頃のものであろう。

17は瀬戸・美濃産の皿で、外面の体部以下を削り出すことにより整形されている。内面全体と外面の口縁部には灰釉が掛けられており、見込みの部分には目あとが観察される。16世紀後半のものと考えられる。

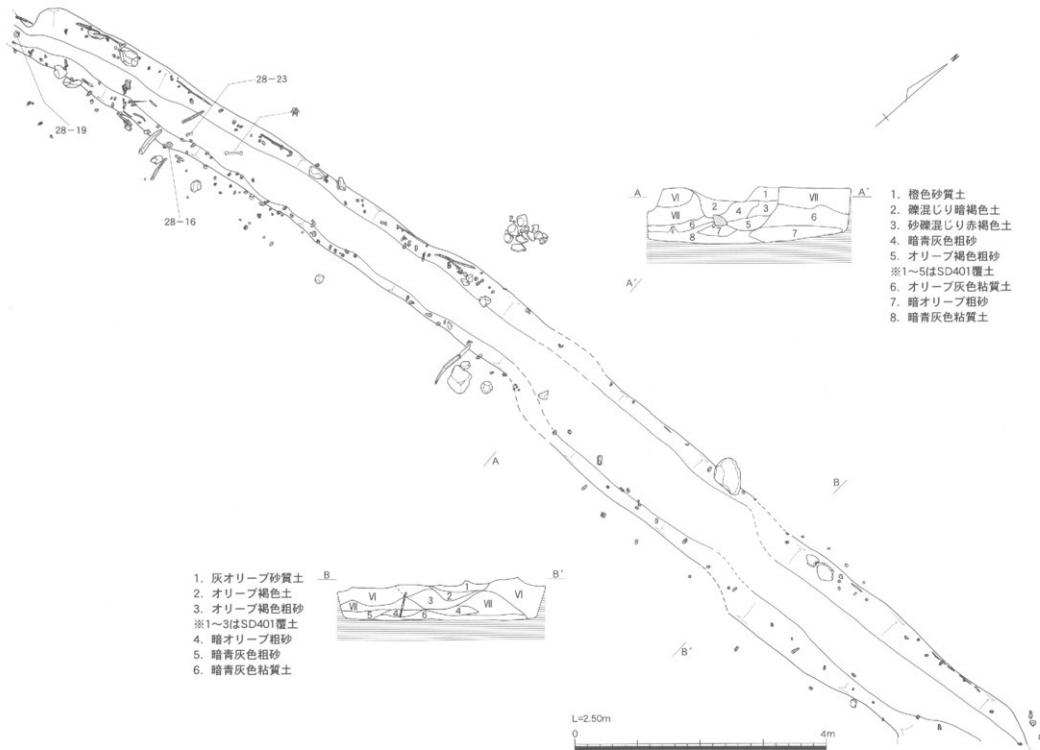
18は櫛である。櫛構であり歯は30本挽き出されているが、約半数は欠損している。両側縁の親歯はやや内向している。江戸時代前半のものであろう。



第27図 VI上面検出遺構全体図



第28図 4-2区出土遺物



第29図 水路遺構 SD 401実測図

| 件名番号  | 出土位置   | 名 称       | 口径(長さ) | 底径(幅) | 高さ(厚さ) | 件名番号  | 出土位置     | 名 称      | 口径(長さ) | 底径(幅)  | 高さ(厚さ) |
|-------|--------|-----------|--------|-------|--------|-------|----------|----------|--------|--------|--------|
| 28-1  | S D101 | 近世陶器 碗    | —      | 7.0cm | —      | 28-13 | S F301   | 近世陶器 碗   | 50.2cm | —      | —      |
| 28-2  | *      | 近世陶器 丸碗   | —      | 4.6cm | —      | 28-14 | *        | 近世陶器 碗   | —      | 16.4cm | —      |
| 28-3  | *      | 近世陶器 灯明受皿 | —      | 6.0cm | —      | 28-15 | S F303   | 近世陶器 碗   | —      | 7.0cm  | —      |
| 28-4  | *      | 近世陶器 盆    | —      | 8.8cm | —      | 28-16 | S D401   | 中世陶器 盆   | 9.4cm  | 5.0cm  | 2.4cm  |
| 28-5  | *      | 土製品 土鍋    | 2.4cm  | 2.2cm | —      | 28-17 | C 29 V層  | 中世陶器 盆   | 13.6cm | 7.0cm  | 3.7cm  |
| 28-6  | *      | 近世陶器 碗    | 19.0cm | —     | —      | 28-18 | B 31 VI層 | 木製品 棒    | 9.6cm  | 4.5cm  | 1.0cm  |
| 28-7  | S D102 | 近世陶器 碗    | —      | 3.0cm | —      | 28-19 | S D401   | 木製品 梨椀   | —      | 5.8cm  | —      |
| 28-8  | *      | 灰釉系陶器 碗   | —      | 8.0cm | —      | 28-20 | S X301   | 木製品 曲物蓋板 | 10.7cm | —      | 0.8cm  |
| 28-9  | S X301 | 灰釉陶器 盆    | —      | 8.0cm | —      | 28-21 | S D101   | 木製品 下款   | —      | —      | 2.7cm  |
| 28-10 | *      | 近世陶器 碗?   | —      | 5.4cm | —      | 28-22 | S F301   | 木製品 不明品  | 10.5cm | 3.1cm  | 0.7cm  |
| 28-11 | *      | 近世陶器 灯明受皿 | 10.6cm | 5.2cm | —      | 28-23 | S F301   | 木製品 不明品  | 26.1cm | 2.1cm  | 1.4cm  |
| 28-12 | *      | 中世陶器 盆    | 10.8cm | 5.2cm | 2.5cm  | 28-24 | B 31 IV層 | 金属製品 銀   | 11.4cm | —      | 0.4cm  |

第6表 4-2区 出土遺物一覧表

## 第Ⅳ章　まとめ

これまで述べてきたように保録ヶ谷遺跡の調査は古くは平安時代、新しいところでは江戸時代末以降の遺構も対象としたことで、今まで知ることができなかつた近世の水田や畠の状況を把握することができた。近世の遺構はより近い現代に近いということで顧みられなかつた傾向もあるが、区画整理や圃場整備などにより日々景観が変化して、数十年前の景観も忘れられつつあるという現状を鑑みれば、今回の調査で近世はもとより近代に近い遺構にも発掘調査というひとつのアプローチが有効であることが立証できたといえよう。ここでは調査でみられた時代別に再度遺跡を整理してみたい。

### 平安時代の様相

平安時代の様相は1-2区でみられる。地形的にみると遺物が出土したⅢ層は部分的にインターフィンガー状を呈する水性による自然堆積層であり、平安時代後期（10世紀前半～11世紀前半）以外の土器類が含まれないため、当該時期の前後に形成されたものと思われる。また、葦の根が多く含まれることから、当時は一面に葦原が広がる湿地であったと解釈できる。このような湿地に人が住み暮らすことは困難であり、遺物に摩滅がみられなかつことからも灰釉陶器などを所持していた人々は近在するより安定した丘陵部や花沢川の自然堤防上に暮らしていたと推測できる。今回の資料が当時の居住域と現在営まれている花沢、吉津の集落との直接的な関係を裏づけるものではないにしても、花沢川の上流域における人々の生活の起源のひとつを示すものとして理解することができよう。遺物的な面からみるとⅢ層は灰釉陶器や白磁、下駄、斎串などが出土している。数は少ないながらも土器類は全て平安時代後期のもので占められている。当地域における貿易陶磁の存在が一般的であったのか特異であったのかについては当該期にどのくらいの流通量があったのか今後の調査の累積を通して知ることができるであろう。ちなみに現在周辺で灰釉陶器・灰釉系陶器と白磁を併せて出土している遺跡には「小川駅」に比定されている小川城遺跡がある。

### 鎌倉時代～室町時代の様相

中世の様相は出土遺物も少なく判然としないが、所々に鎌倉時代と室町時代後半を垣間見ることができる。鎌倉時代では灰釉系陶器が出土しており、小川城遺跡から出土した「七郎丸」銘のある灰釉系陶器とはほぼ同時期のものである。室町時代後半では4-2区のS D401から16世紀後半と考えられる遺物が出土していることから、水路が引かれ、耕地とした開墾された時期は16世紀後半前後と知ることができる。1-2区のI層からも16世紀後半の遺物が出土している。遺跡の西側に位置する花沢城が機能していた時期と同一であり、これらを総合してみれば16世紀は当地域が躍進した時期のひとつとして捉えることが可能であろう。

### 江戸時代の様相

江戸時代の様相は1-2区、4-1区、4-2区でみられる。1-2区では、湿地が安定した後に集落が営まれている。生活面は砂礫の押し出しによって壊され判然としなかつたが、江戸時代前半には比較的土砂の供給量が多く標高も高く安定した丘陵部に建物が建てられ、居住域となっていたことは確かである。また、居住域の東側を流れる川は幅30m以上になる可能性があり、花沢川の旧流路のひとつとも考えられる。江戸時代には花沢、小浜、吉津、野秋などには花沢川の水が引き込まれて用水とされていたことが知られており、川の岸にみられる護岸や中に築かれていた石垣状遺構や石組遺構も川の保全や用水の確保のために築かれているとも考えられよう。4-2区で検出された耕作域は中世の地割りを踏襲するもので、更に近代まで引き継がれる。この傾向は、土地区画が所有や生産性、水利などが複雑にからみ容易に変更できないものであることを反映している。更に、浚渫された砂を埋め込んだと思

われる土坑の存在も水路が大切に守られていたことを示唆するものであろう。4-1区にあたる丘稜部が畠として開墾されるのは江戸時代後半～末のことと考えられ、石垣を積んで土地の区画をするとともに、耕地をより水平に営もうとする傾向を伺うことができる。現在、遺跡周辺の丘陵斜面にみられる段々畠も石垣を伴っており、これらの起源もこの時期に求められるのであろうか。以上の事象から、調査区の周辺地域では室町時代後半から江戸時代前半には花沢川からの用水路が引かれた水田域が拡がり、更に江戸時代後半～末にかけて丘稜部に畠が開かれて耕地が拡大されていった過程を知ることができる。なおかつ集落は丘稜部を中心に営まれるという景観を復元することができる。

#### おわりに

調査の主体が江戸時代であったため、当初は調査区周辺に現在でも知りうることが多く残されていると感覚的に思っていたが全くの誤りであった。調査中の聞き取りでも圃場整備前（昭和40年代以前）の様子も余り記憶されていないことが判明したこともある、より新しいものも記録に留めたわけである。その結果、室町時代後半以降が現代まで時間が連続と連続している事実を体感でき、再確認し得たことは我々に新たな視点をもたらす多大な収穫として歓迎すべきことであろう。

今回の調査では遺物量も少なく、余り踏み込んで実像をつかむことができず至る所で拡大解説に陥ってしまったことは残念であった。特に周辺に確実に予期できる古代～中世の遺跡については今後の周辺地域の調査を期待したい。

#### 〈参考文献〉

- 阿部正信『駿國雑誌』 吉見書店 昭和52年復刻
- 角川書店『角川日本地名大辞典』22静岡県 昭和57年
- 田口昭二『美濃焼』ニュー・サイエンス者 昭和58年
- 静岡県『静岡県史』資料編1 平成2年
- 静岡県『静岡県史』資料編2 平成2年
- 静岡県『静岡県史』資料編3 平成4年
- 焼津市教育委員会『道場田・小川城遺跡II』 1987
- 焼津市教育委員会『這添遺跡』 1987
- 焼津市教育委員会『焼津市埋蔵文化財発掘調査報告書VI』 1987
- 静岡県教育委員会『静岡県の中世城館跡』 1981
- 静岡県教育委員会『静岡県文化財地名表II』 1986
- 静岡県教育委員会『静岡県文化財地図II』 1989
- 藤沢良祐「本業焼の研究(1)」「研究紀要VI」瀬戸市歴史民俗資料館 1987
- 藤沢良祐「本業焼の研究(2)」「研究紀要VII」瀬戸市歴史民俗資料館 1988
- 藤沢良祐「本業焼の研究(3)」「研究紀要VIII」瀬戸市歴史民俗資料館 1989

## 写真図版

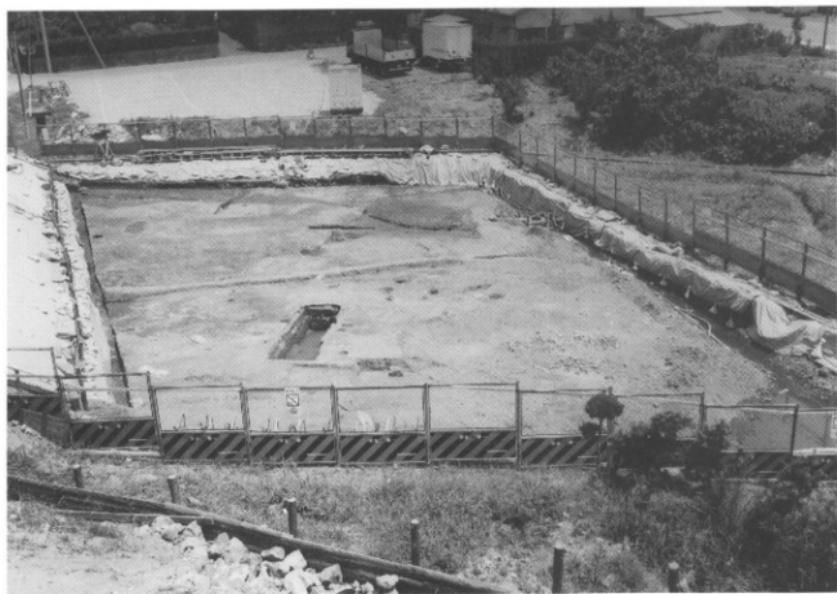


遺跡遠景（南側より）



1-1区調査前・1-2区盛土除去風景（西側より）

図版 2



1-2区 遺構検出面全景



1-2区 ピット群全景



1-2区 自然流路 SR101 (北西側より)



1-2区 石組造構 SX101



1-2区 石垣状遺構 SX102



1-2区 自然流路 SR101遺物出土状況



1-2区 I層中遺物出土状況（1）



1-2区 I層中遺物出土状況（2）



1-2区 ピット114断ち割り状況



4-1区・4-2区 調査前状況



4-1区 水路遺構 SD101 (西側より)



4-1区 遺構発掘状況全景



4-1区 水路遺構 SD101石組状況



4-1区 煙遺構 SX102完掘状況（南東側より）



4-1区 煙遺構 SX102石垣



4-1区 煙遺構 SX102遺物出土状況（1）



4-1区 煙遺構 SX102遺物出土状況（2）



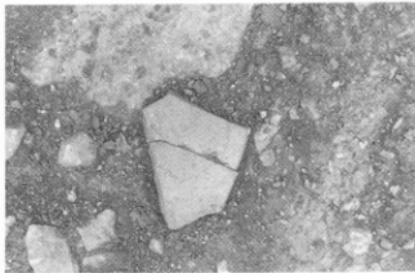
4-1区 集石遺構 SX101（南西側より）



4-1区 集石遺構 SX101南面石垣



4-1区 集石遺構 SX101遺物出土状況（1）



4-1区 集石遺構 SX101遺物出土状況（2）

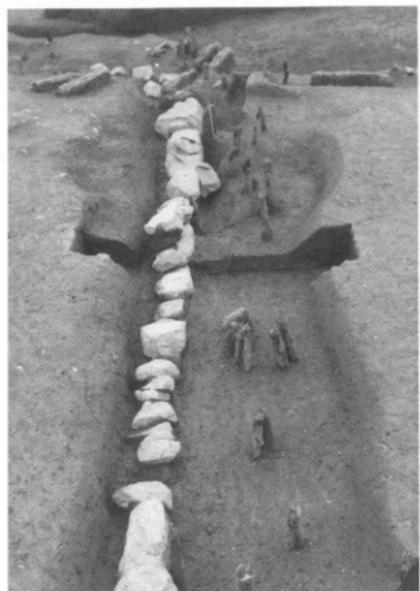
図版8



4-2区 水路遺構SD101（東側より）



4-2区 調査区南西面土層状況（SD101部分）



4-2区 水路遺構SD102（北側より）



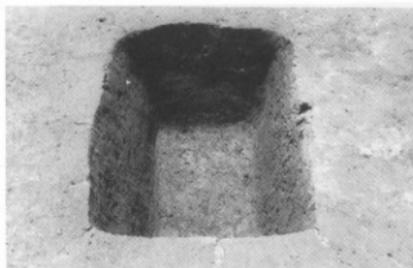
4-2区 調査区北面土層状況（SD102部分）



4-2区 IV層上面検出遺構全景



4-2区 畦畔SK 201（北側より）



4-2区 土坑SF 201完掘状況



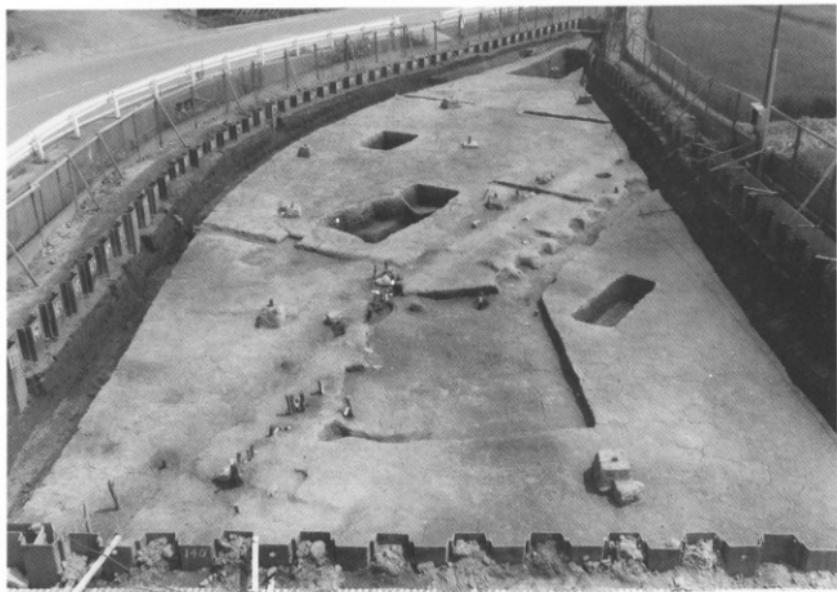
4-2区 土坑SF 202完掘状況



4-2区 土坑SF 203完掘状況



4-2区 IV層上面遺物出土状況（鉄）



4-2区 V層上面換出遺構全景



4-2区 土坑状遺構SX 301覆土内礫混入状況



4-2区 土坑状遺構SX 301完掘状況



4-2区 土坑SF 301完掘状況



4-2区 土坑SF 302完掘状況



4-2区 土坑SF 303完掘状況



4-2区 V層遺物出土状況（瀬戸・美濃皿）



4-2区 VI層上面検出遺構全景（手前部分）



4-2区 水路遺構 SD 401全景（西側より）



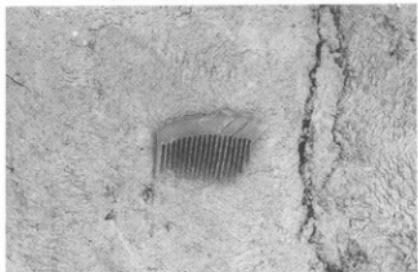
4-2区 水路遺構 SD 401覆土内遺物出土状況（漆桺）



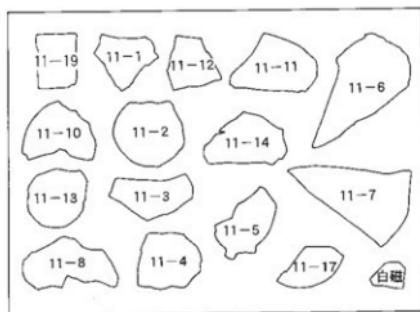
4-2区 水路遺構 SD 401覆土内遺物出土状況  
(瀬戸・美濃皿、不明木製品)



4-2区 水路遺構 SD 401底面遺物出土状況（骨）



4-2区 VI層上面遺物出土状況（櫛）





11-9



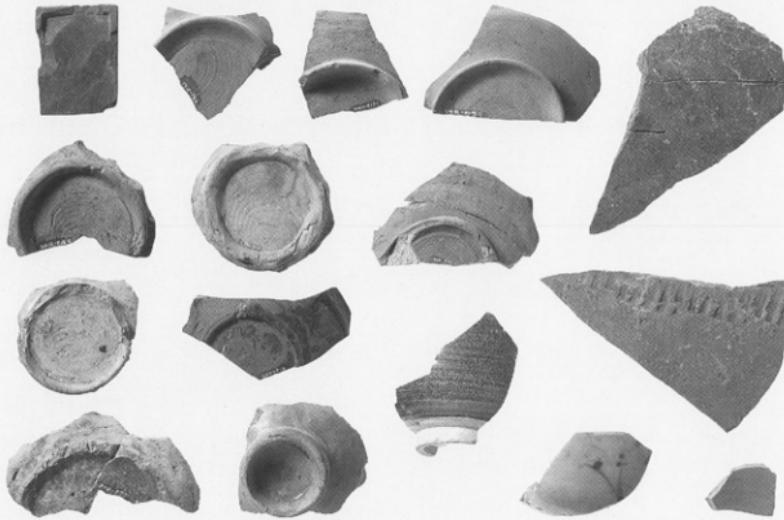
11-15



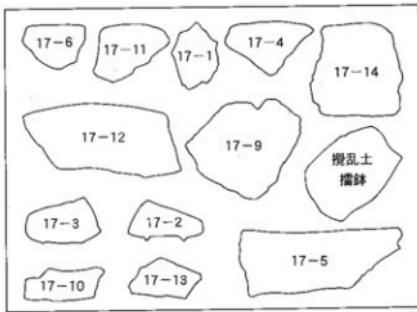
11-18



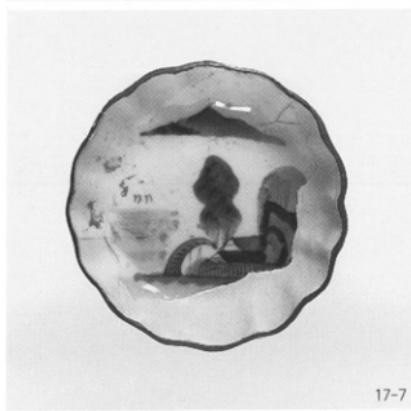
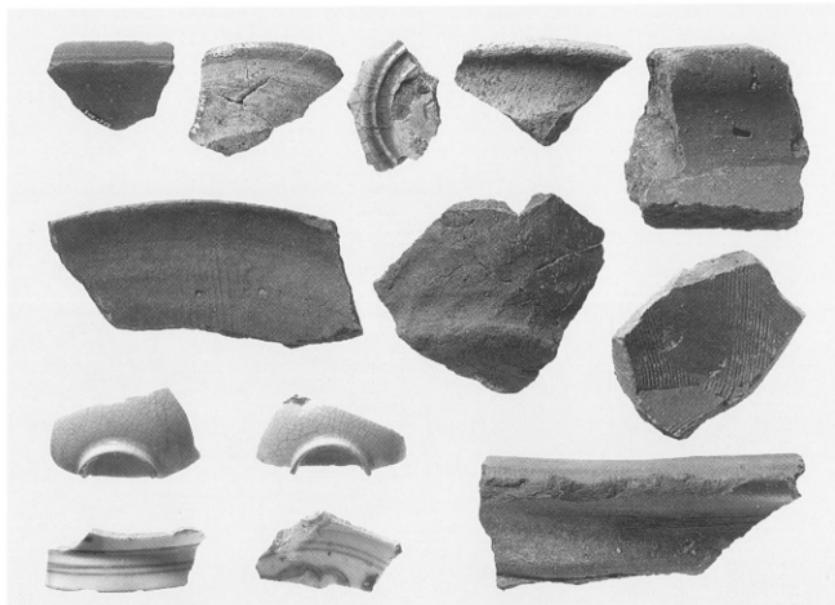
11-20



1-2区出土遺物



図版14



17-7



17-8

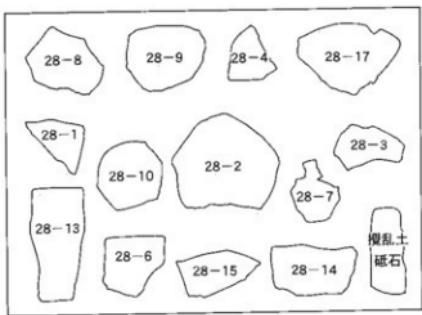
28-5

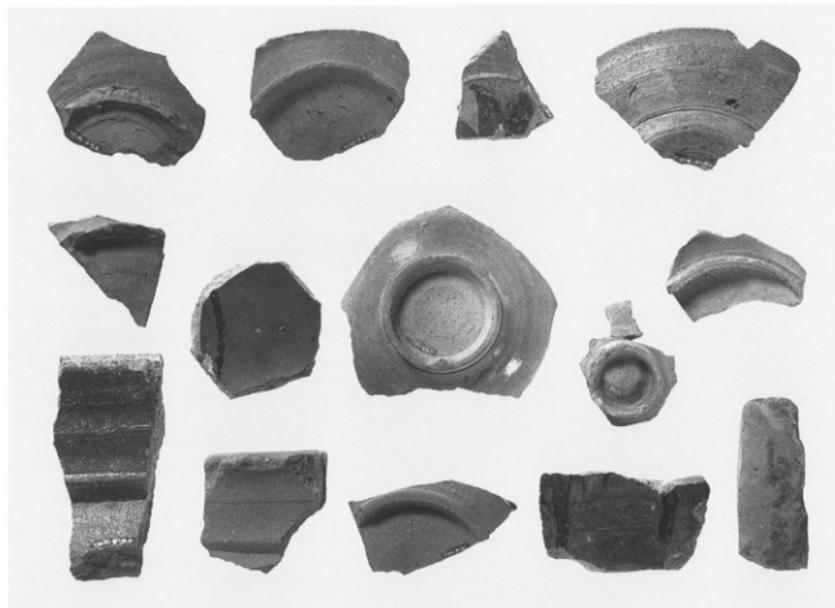


28-12



4-1区・4-2区出土遺物





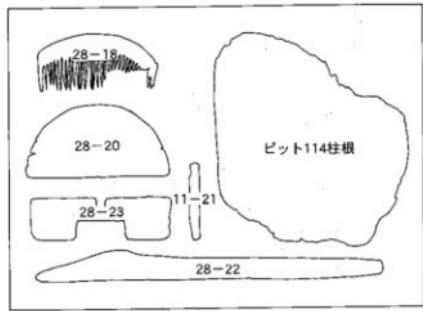
28-19

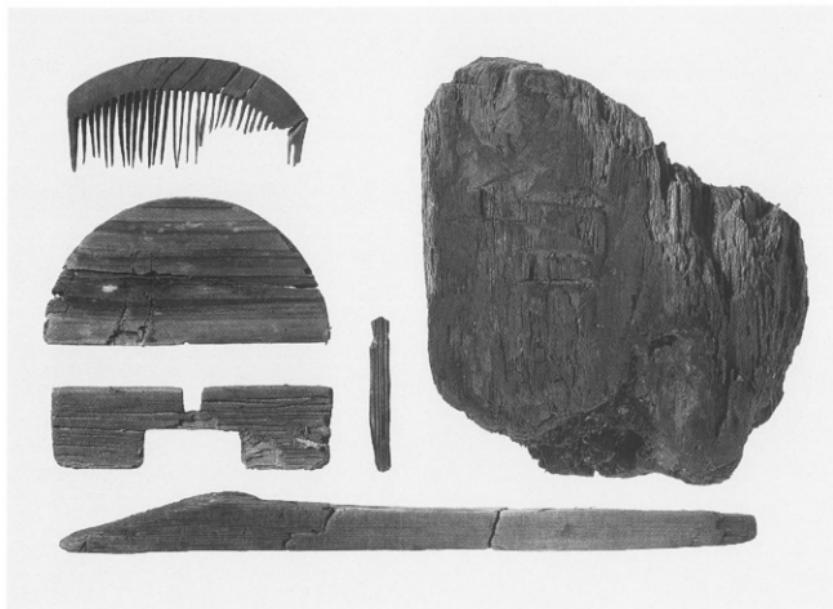


28-21

28-24

4-2区出土遺物





1-2区・4-1区・4-2区出土木製品

## 報告書抄録

|        |                                       |
|--------|---------------------------------------|
| ふりがな   | ほろがやいせき                               |
| 書名     | 保録ヶ谷遺跡                                |
| 副書名    | 平成7年度日本坂トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書       |
| 卷次     |                                       |
| シリーズ名  | 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告                     |
| シリーズ番号 | 第81集                                  |
| 編著者名   | 河合 修・松倉金吾                             |
| 編集機関   | 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所                     |
| 所在地    | 〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL0543-67-1171~3 |
| 発行年月日  | 西暦1996年3月31日                          |

| 所取遺跡       | 所在地            | コード   |      | 北緯                | 東経                 | 調査期間                 | 調査面積                | 調査原因                             |
|------------|----------------|-------|------|-------------------|--------------------|----------------------|---------------------|----------------------------------|
|            |                | 市町村   | 遺跡番号 |                   |                    |                      |                     |                                  |
| 保録ヶ谷<br>遺跡 | 静岡県焼津市<br>野秋ほか | 22212 | —    | 34度<br>53分<br>36秒 | 138度<br>20分<br>12秒 | 19950424<br>19950930 | 4,900m <sup>2</sup> | 東名日本坂<br>トンネル改<br>築工事に伴<br>う緊急調査 |

| 所取遺跡名      | 種別       | 主な年代                   | 主な遺構  | 主な遺物  | 特記事項                   |
|------------|----------|------------------------|---|---|------------------------|
| 保録ヶ谷<br>遺跡 | 集落<br>田畠 | 平安時代・<br>室町時代～<br>江戸時代 | ピット<br>土坑<br>自然流路<br>水路<br>水田<br>畑<br>石垣状遺構<br>石組 | 灰釉陶器<br>灰釉系陶器<br>中、近世陶磁器<br>下駄<br>梅鉢<br>硯<br>土鍤<br>漆椀 | 志太平野の中世末～近世の<br>耕作域を検出 |

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第81集

## 保録ヶ谷遺跡

平成7年度日本坂トンネル改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年3月31日

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印 刷 所 株式会社ニシガイ  
清水市本町12番6号  
TEL 0543(52)2188